
代物語

岩乃江片羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

代物語

【コード】

N8882I

【作者名】

岩乃江片羽

【あらすじ】

戦場ヶ原ひたぎと連絡が取れなくなってから2日が経っていた。

偽物語後の世界を舞台に、相変わらずな阿良々木暦と、すっかり丸くなって面白みが無くなってしまった戦場ヶ原ひたぎと、その周りの少女たち、そして一匹の怪異が織り成す、日常の延長線上の事件。

ひたぎフェアリー（前書き）

試験投稿。

自分のHPにあるものを縦書きで読みやすいように編集して投稿しています。

必要最低限の改行しかしていないので、横書きで読むのはかなりキツイと思います。

そんなに長い話ではないので、暇つぶしにでもどうぞ。

ひたぎフェアリー

001

戦場ヶ原ひたぎと連絡が取れなくなってから二日が経っていた。夏休みは終わって、学校で授業が平常どおり行われるようになり、気分も受験シーズン真っ只中といった感じ。出来るだけ早くこの苦しみから開放されたいと願う一方で、戦場ヶ原や羽川に勉強を教わっている時間が、ただただ苦痛なのかと問われれば、そうとは言い切れない自分もいる。

そんな微妙なテンションで迎えた一昨日の日曜。僕はいつもどおり戦場ヶ原宅を訪ねたのだが、勉強の用意をして僕を迎えてくれる筈の戦場ヶ原の姿は、そこには無かった。特になんて連絡をしなくても、戦場ヶ原には毎週日曜日に勉強を見てもらおう事になっているからと、メールの一つも入れなかったのがいけなかったのかも知れない。

夏休みの終わり頃に合鍵を貰っていたから中に入る事は出来たので、きつと近くに出かけているだけで直ぐに戻ってくるだろうと、そのまま一人で一刻程待っていたのだが、結局戦場ヶ原は戻っては来なかった。今思うと毎日の勉強（夏休み以降は日曜日の休みすらも無くなっていた）のせいで疲れていた事もあり、一日休みが出来たと一昨日は特に気にしていなかったと思う。

そして翌日の月曜日、つまり昨日。戦場ヶ原が学校を欠席した。今の彼女は携帯の連絡先のカテゴリが、父親、公共機関、着信拒否の三つしか無かった以前の戦場ヶ原とは違う。その筈なのにこちらからの電話にも出ず、メールでの返信すら無いので羽川と二人で心

配っていた。

で、そのまた翌日の今日、十月三十一日。僕は登校前に早起きして、再び戦場ヶ原の家に向かっていった。一昨日は留守にしていたが、実は家で体調を崩して床に伏しているのかもしれない。戦場ヶ原の父親は中々多忙で家に居る事も少ないし、僕は彼に「娘をよろしく頼む」とまで言われているのだ。そこまで言われて、何もしない訳には行かない。そうでなくても、彼女の看病をするというシチュエーションに、不謹慎ながらも憧れたりしていた。

こんな風に、受験生としても彼氏としても有るまじき浮かれた心境で戦場ヶ原の家を訪れた僕は、その報いを受ける事になる。それも飛びつきりふざけた、冗談交じりの悪戯によって。

十月三十一日、ハロウィン。日本ではそこまで定着している訳では無いが、欧州等では吸血鬼等の伝承上の生き物が跋扈する日とされている。最近ではそんな事よりもトリックオアトリート お菓子をくれなきやイタズラするぞ、なんていう独特の脅し文句の方が有名だろうか。

結局のところ今回の事件の顛末は、この悪戯好きとして最もお誂え向けな日に現れた、はた迷惑な怪異の一人勝ち、ただそれだけの全くもって下らないものである。

「やっぱり居ないか……」

チャイムを押ししても返事が無いので、一応中の様子を伺って見たが、戦場ヶ原家は一昨日僕が見たときと、なんら変わった様子は無かった。まあ、風邪で寝込んだりしていてもメールくらいは出来るだろうしな。となると、やっぱり何処かに出かけたのだろうか。しかし、僕や羽川に一言も言わずにというのは若干 いや、かなり気になる所である。大体、一昨日も僕達に何も言わずに約束をすっぽかしている訳で、それは更正する前の戦場ヶ原であつても、らしく無い事だった。もしかしたら書置きみたいな物があるかもしれない。僕は少し悪いかと思いつながらも彼女の家を物色し始めた。

ふと、こうして改めて見回してみると思うのだが、貝木との一件以来、戦場ヶ原の家に少しずつ物が増え始めている。最も、可愛らしいぬいぐるみが置かれているなんていう事はなく、増えたものといえば大人しいデザインの生活雑貨や、植物の鉢植え等。あとは、僕と二人で写った写真。

……未だに、彼女のこういう変化を感じるたび、感動すら覚えている自分が居る。ここで僕に勉強を教えている最中に、

「もう正攻法で勉強するのは諦めて、流行のAO入試を狙ってみるのはどうかしら阿良々木君？ 今から一回体を二つに切断した後元に戻ります、なんてやったら大ウケ間違いなしよ」

とか。

「勉強付けで気持ちが悪入っている阿良々木君に、心が温まるような教訓を聞かせてあげるわ、覚えておきなさい。世の中には、お金では買えないものが沢山ある、そしてそれと同じように、阿良々木君みたいな人間には、どんなに努力しても出来やしない事がいっぱいあるのよ」

なんて言っていたあの戦場ヶ原の机に、僕と一緒に笑顔で写った彼女の写真が飾られているのだ。心動かされて、当然だろう。むしろ心躍ると言ってもいいくらいだ。

閑話休題。探してはみたものの、特に書置きのような物は無かった。そして、今日は家をいつもより三十分ほど早く出てきたのだが、そろそろ始業の時間が迫っている。二人に勉強を教えてもらっておきながら、いざ受験ぎりぎりになって、出席日数が足りませんでしたがでは笑い話にもならないだろう。一応、帰ったら連絡するようにと、僕の方から書置きを残して、もう学校に向かう事にする。

その時、がちやつ　と、玄関の方から音がした。

「あら？」

「え？」

僕はペン先をルーズリーフに付けた状態で、戦場ヶ原は玄関のドアを開けた状態で、お互いに動きを止めた。そして戦場ヶ原は家中に僕が居るのを発見するなり、まるで生ゴミを見るような視線をこちらに向けてくる。

「貴方、私の家で何をしているの？」

あれ、何か戦場ヶ原雰囲気がおかしくないか？　なんというか、この明らかに僕を人間扱いしてない視線が懐かしい感じ。なんて頭の片隅で思いながらも、ほぼ条件反射的に僕は言い訳をしていた。

「か、勝手に家に入って悪かったって。……でも連絡一つよこさないガハラさんだって悪い　」

僕の台詞を遮って、戦場ヶ原は玄関に置いてあった僕の靴を、こちらに向かって投げつけてきた。かなりのスピードでもってつま先部分が、僕の顔面目掛けて飛んでくる。

「あぶなっ！」

僕が横に倒れこむようにしてそれを避けている間に、靴を履いたまま家の中に押し入ってきた戦場ヶ原は、机の上に置かれていた僕のボールペンを逆手に持ち、それをまるで短剣のようにしてこちらに切りかかってきた。

どうしてっ？ 勝手に家に入った程度でこの仕打ち！ とうか今まで使った事は無かったけれど、合鍵をくれたっていうのは、家の中に入ってもオツケーって事じゃないんですか戦場ヶ原様。

「待て待てっ、ガハラさん落ち着けっ！」

「さつきから言ってるそれは私の事？」

行動とは裏腹に落ち着きはらった声の戦場ヶ原。

「当たり前だろ、何言ってるんだガハラさん？」

「慣れなれしく呼ばないで」

すると戦場ヶ原は、ボールペンを持たない左手で、僕に何かを投げつけてきた。

「!？」

目潰しっ！ 砂 いや違う僕のシャーペンの芯だ。数十本の芯を粉々に砕き、目潰しにして僕に投げつけやがった！ なんで躊躇い無くこんな事が出来るんだこいつは。最近は攻撃的な部分はなりを潜めて、すっかり穏やかになったと思っていたのに。まるで一期の頃のような挙動である。いや、それ以上かもしれない。思い返してみれば、彼女からここまで物理的に攻撃らしい攻撃を受けたのは、頬肉を綴じられた日以来だ。

「くっ！」

くそっ、目がうまく開けられない。そんな僕の首筋を、何か物凄いスピードで通過した。一瞬送れて、鋭い痛みがそこを走る。純粹な恐怖を覚えて、思わず壁際まで後ずさり。いや、……本気で殺しにきてないか？ これはどう考えたって痴話喧嘩なんて可愛いものじゃない。

「おい、幾らなんでもやり過ぎだぞガハラさん！」

「だから慣れなれしく呼ばないで頂戴。と、いうか」

酷く冷たい声で、戦場ヶ原は言葉を続けた。

「貴方、誰？」

は？

「何を、言ってるんだ？」

「私は貴方のような男は知らない、と言っているのよ。我が物顔で人の家上がりこんで。いったいどういづつもり？」

僕は何とか開くようになった目で彼女の表情を伺うが、とても冗談を言っているようには見えない。僕が呆然としていると、戦場ヶ原はいつの間にか僕の筆箱に忍ばせていた左手に何かを握りこんだ。「わかる？ 何処の誰だか知らないけれど、私にとって今の貴方は勝手に人の家に不法侵入している不審者以外の何者でもないのよ」

不味い、戦場ヶ原はまだ臨戦態勢を解いた訳ではないようだ。今のも手の中に何か武器を仕込んだのだろう。必死に僕は自分の筆箱の中身を思い出す。シャーペン、ボールペン、その芯、赤ペン、15センチ定規、付箋、消しゴム、蛍光ペン。武器になりそうな物はさっきのボールペンくらいだと思うのだが、それでも今の彼女ならどんな物でも兵器として扱うことが出来そうな気さえする。

「本当に、僕の事を知らないって言うのか？」

「ええ、知らない、記憶に無いわね」

「三年連続お前のクラスメイトで、最近ではお前は羽川と一緒に、僕の家庭教師をしてくれてたじゃないか」

「だから、知らないと言っているでしょう」

「名前は阿良々木暦。お前の、彼氏だぞ？」

「阿良々木、暦？」

その顔に初めて同様らしいものが浮かんだ。

「覚えているだろう？」

「ええ、いえ、覚えが無いわね」

「そんな」

記憶が無くなっている？ 一体何があった？

「何をぶつぶつ言っているの？ 貴方」

「羽川の事は、覚えているか？」

「羽川……羽川翼の事かしら」

僕の事だけ忘れている？ というより様子から察するに以前の、僕と出会う前の戦場ヶ原に戻ってしまったような。そんな僕の

思考を戦場ヶ原は脅しで遮った。

「なんだか知らないけど、特別な理由があつたみたいだから今日の所は許してあげる。だから即刻この家から出て行きなさい。でなければ今度こそ実力行使に訴えるわよ」

戦場ヶ原と最後に会ったのは二十七日の金曜日のことだった。普段学校のある日は戦場ヶ原の家に行く事は無いんだけど、そろそろ目標としている大学の模試があることもあって、臨時の勉強会が行われていた。

「どうしても、阿良々木君は英語が他の教科の足を引っ張ってしま
うわね」

「申し訳ない、どうしても暗記教科はな……」

「ある程度の英単語と熟語、特に動詞周りに関しては力技で覚えて
もらう他無いわ。今でもある程度の文法問題は解けるようになって
きてるけれど……」

「長文だよな、問題は」

「ええ、どうしても読むのが遅いわね。でもそれは今は覚えていな
い単語の意味を、周囲から推測しようとしているからだと思うのよ。
そういう能力も重要だし、後は周りが当たり前知っている単語さ
え一通り覚えてしまえば、問題無いと思うわ」

「悪いな、迷惑かける」

「いいのよ、好きでやっている事だし」

「……」

そんな風に言われると、本当に頑張らないと思う。僕としても
戦場ヶ原と四年間一緒に大学に通いたいし。

「まあ、これで今日のノルマはおしまいよ。日曜日までにここだけ
やってきて頂戴ね」

「終わったー……」

思わず脱力する。

「お疲れ様、今紅茶を淹れるわ」

「ありがとう、戦場ヶ原」

夏休みは夕食を振舞ってくれる事も多かったが、二学期になって

からは平日は控えるようになった。あまり連日で遅くなると、妹をはじめ家族からの風当たりが強くなるのだ。

「阿良々木君は、一人で勉強を頑張るの苦手よね」

ふと、戦場ヶ原はケトルに水を入れながらそんな事を言った。

「まあそうだな。でもそんな事言ったら、誰だっけ誰かが見てる方が勉強するもんなんじゃないのか？」

「そんな事ないわよ。私は一人のほうが集中できるわ」

「ふむ」

戦場ヶ原にそう言われると何となく納得。この辺りは個人差なんだろうな。

「でも英単語なんて、人に教えてもらって覚えるようなものじゃないのよね」

「そりゃあまあそうだけれどな。ああ、ところで戦場ヶ原。あのゲームとかで英単語なんかを覚える奴ってどうなんだ？」

何となく、以前千石に任天堂DSのゲームを借りた事があったのを思い出したので聞いてみた。

「全く効果が無いわけじゃあないとは思うけれど、どうかしら、私はあまり意味がないと思うわ」

「でもああやって楽しく勉強した方がいいってというのは、いろいろな所で言われていないか？」

「勉強が楽しければ、自発的にやる時間が伸びるとかその程度のものよ」

「そんなものなのか？」

「つまらなく普通の勉強をするより、楽しくやったほうが効率が高いというのは……。そうね、インプットの仕方の差かしらね」

「は？」

「勉強っていう認識で入った知識かどうか、という話よ。例えば英語で五月の事をMayと言うけれど、阿良々木君これをトトロに登場する姉妹の名前から覚えていたでしょう？」

「ああ、そういえばそうだな」

勉強を教えてもらい始めた初期の頃に、そんな話をした気がする。「それって、最初はそんな意味があるとも知らずにあの二人の名前を覚えていて、後でご両親やお友達に、あの二人の名前は実は両方共五月という意味だ。という風に言われたと思うのだけれど、違いかしら？」

「ああ、違わない。そうだった気がする」

確か妹のどつちかが自慢げな顔で、頼んでもいないのに教えてきたのだ。そんな事知ってるよ、なんて見得を張ったような覚えがある。

「そんな風に勉強と関係の無い所から得た知識を、勉強と結びつける覚え方は、ある意味ではとても有効ね。そうして別の分野と関連付けて得た知識は、勉強に限らず得てしてよく覚えているものだよ。断片的でなく、他との関連で覚えているからかしらね」

ティーポットに茶葉を入れ、お湯を注ぎながら戦場ヶ原は続ける。「化学の有機に出てくるギリシヤ数字を覚える時も、3のtriはトライアングル、4のtetraはテトラポッド、5のpentaはアメリカのペンタゴン、そんな風に関連させて覚えたいでしょう」

「ああ、というか羽川からそうやって教わった」

「そういう風に勉強とは関係の無い方法でインプットした知識を、後から関連付けてやれば、覚える量が減るだけでなく強く印象に残るから覚えやすいし、思い出しやすいのよ」

「……でもそれなら、やっぱりゲームで勉強するのは意味があるんじゃないのか？」

「阿良々木君、その勉強をするゲームを、勉強じゃないと思ってプレイできるかしら？」

「……まあそうだよな。」

「それにこうやって関連付けて覚える勉強法が、絶対に良いとは言えないの」

「そうなのか？」

「特にゲーム等のエンターテイメント性の強い媒体から得られる情

報は、全てが全てという訳ではもちろんないけれど、どうしても信憑性が低いわ。それにこういう風に得た情報は、なまじ強烈に覚えてしまう分、間違っていたら面倒なのよ。もともと関連性の無いはずのカテゴリから引っ張ってきている訳だし、似ているだけでまるで違うなんて事も多いわ。語源は同じでも、オクトパスの足は八本、オクトバーは十月。一緒に覚えて、同じような意味だろうと思っ込んでしまったら目も当てられないわ。……うん我ながら美味しい」

そう言っつて、自分で一口口をつけたマグカップを渡してくる。

「有難う」

少しだけ照れくさかったりもするが、受け取ってその紅茶を飲んだ。

「しかしそっか、まあ何にせよあの千石から借りたDSは、あんまり意味が無かったんだな」

「……千石ちゃんから借りていたの」

「何かガハラさん、千石の話題になるとテンション下がるよな。苦手なのか？」

「苦手という訳では無いのだけれど……」

どうにもハッキリしない戦場ヶ原。ちなみにこれは彼女に限った事では無く、千石の方も戦場ヶ原の話になると、似たような感じになる。相性が悪いのだろうか？

「ああでもどうも年下、というか子供には慣れないわね」

「そっかいえば前もそんな事も言っていたな」

台所を片付けた戦場ヶ原は僕の隣に、寄り添うようにして座った。最近の定位置である。照れくさい、というかくすぐったいけれど、もちろん不快ではない。

「一昨日の事なただけれど、公園に一人ぼっちで佇んでいる子供が居たのよ」

ん？ もしかして八九寺の事だろうか。

「いえ、多分違うと思うわよ。何だか凄まじくボロボロの帽子を深

く被っていたし、やっぱりお洒落にしては切れ込みの入りすぎた服を着ていて、パツと見かなり風変わりな格好をしていたわ」

それじゃあ違うな。八九寺は始めてあった時から、ずっと同じ服装をしている。正直最近では見ているこっちが寒いくらいだ。

「阿良々木君に習って、私もちよっとお節介を試してみようと思っ
ね。声をかけてみたの」

「僕に習ってお節介っていうのは、どういう意味だよ」

「深読みしないでよ、褒めているのよ？ それが阿良々木君の良い所じゃない」

「いや、まあ……」

そうやって、面と向かって言われるととても照れる。こつこつ事を、さらっと言ってくる辺り、戦場ヶ原は相変わらずだ。尤も、以前と違って無表情ではなく、うっすらと優しい笑みを浮かべてはいるのだが。

「どうしたんですか、もしかして迷子ですか、大丈夫ですか？ と声をかけたら、お前なんだか変な奴だな、と言われて逃げられてしまったわ」

「何で子供相手に敬語なんだよ」

抜けている、というより力が入りすぎている。

「あの位の子供って、子ども扱いされるのを極端に嫌いそうな気がしたのよね」

「まあそれは、解らないでもないけれど」

それにしたって極端すぎる。

「やっぱり阿良々木君みたいに上手くはいかないわね」

「僕を見本にしようとするな」

僕だって、マトモに上手くやれた試しはあんまり無い。後から考えれば結果オーライ、みたいな事が多いだけだ。

「さて、そろそろ帰るよ。紅茶ご馳走さま」

「ええ、また明後日」

「じゃあな」

これが、戦場ヶ原と交わした最後の会話である。

「成る程、確かに特別戦場ヶ原さんに変わったところは無かったみたいね」

「ああ、そうなんだ」

あれから戦場ヶ原の家を追い出された僕は、真っ先に羽川に、戦場ヶ原の記憶が無くなってしまった事を伝える為電話をした。僕の言葉を受けて、羽川は一度僕との電話を切り、戦場ヶ原にかけてみたそうだ。

「確かに、昔の戦場ヶ原さんみたいだった。でも何だか怒っているみたいで、直ぐに電話を切られちゃったから、あんまりよくは判らなかつたけれど」

というのが羽川の感想。まあ、僕が怒らせた直後に電話をしているわけだから、当然といえば当然かもしれない。その後羽川の方から折り返し電話が来たので、改めて今日戦場ヶ原の家であった事。そして最近の戦場ヶ原の様子を思い出せる限り詳しく話した。

「強いて言うなら、その戦場ヶ原さんが公園で会った子供というのが、少し怪しいかもね」

「確かに、僕も薄々そんな気がしてた」

戦場ヶ原から話を聞いたときは軽く聞き流してはいたが、少し考えればそんな格好の子供なんて不自然にも程がある。異様と言ってもいい位だ。もしかすると、怪異であった可能性がある。

「そういえば悪いな、授業サボらせちゃって」

話し合った末、これから二人で一緒に図書館で、それらしい怪異について調べて見る事になったのだ。

「こういう時にまでそんな事言わないで、第一阿良々木君に謝られる筋合いなんて無いよ。あれ、でももしかしたら戦場ヶ原さん、学校に来るのかな？」

「そういう素振りには、無かつたけれどな」

そもそも彼女はここ二日どこに行っていたのだろうか。それすら聞けるような雰囲気では無かった。何たってあそこまでの攻撃をしておいて、これから初めて実力行使に訴える、みたいなニュアンスだったもんな、あの脅しは。それがどんなものなのか、想像もしたくねえ。

「それとあんまり期待しないでね、私は忍野さんと違って専門家って訳じゃあ無いし、ちゃんと力になれるかはわからないよ。それにそもそも話をすれば、まだ怪異の仕業と決まったわけじゃあ無くて、何か別の要因で、戦場ヶ原さんの記憶が無くなってしまうってだけかもしれない訳でしょ」

「まあそうなんだけどな」

でも僕達の話、怪異がらみである事は、ほぼ確実なような気がする。忍野に、三歩歩いたら面倒ごとを巻き込んでくる羨ましい体質、とまで言わせた僕の周りで起こる奇妙な事が、怪異に関わっていると考えるのはごく自然のことだった。

「じゃあまた後でな」

「ええ、図書館で」

そして僕は電話を切った。

しかし、これから図書館に向かうわけだが、果たして成果はあるのだろうか。羽川の言う通り、忍野と違って僕達は専門家では無い。たとえ運良くそれらしい怪異の資料に出会えたとしても、正しい対処が出来るかはまた別の問題である。

「ん？」

そんな風にどうしたものかと考えていた僕の視界の端を、てくてくと能天気な八九寺が歩いてきた。

いや、流石に今日このタイミングで彼女と楽しいお喋りという訳にはいかない。正直な所、彼女がこうして現れる事に違和感すら感じる。八九寺はこういうシリアスな心境の場面では登場しないキャラだと思っていた。まあでも彼女も僕の都合に合わせて行動してい

るわけじゃあ無いし、こういうミスというかバグみたいな事も、偶にはあるだろう。僕の視点からすると無視をするようで、感じが悪いかもしいれないが、恐らく八九寺はまだこちらに気付いていなし、彼女を傷つけるような事にはならないだろう。

許せ八九寺。僕は彼女に声をかけること無く、歩を進めた。：しかし外で長い間電話をしていたせいで体、主にむき出しになっていた手が冷えてしまった。僕は右手をポケットに突っ込んで、冷えてしまった指先を暖める。ホツカイ口なんて気の利いた物は持っていない。人肌に暖められた布の繊維越しに、体温を貰って指にカロリーを供給する。指先を可能な限り深く潜らせて、太ももをこするようにして手を暖めた。左側にはポケットが無いので、上着のボタンを一つ外して隙間をつくり、その中に手を入れて暖める。するとそこで、脳天を打ち抜くような衝撃が走った。

「あれ？」

「さっきから私を無視して何をしてくれてるんですか阿良々木さん！」

気がつくとも目の前に、瞳に涙さえたたえた八九寺の顔があった。

「一体どうしたんだ八九寺？」

「それはこつちの台詞です阿良々木さん！いきなり私の体に抱きついてきたかと思ったら、スカートのポケットに手をつっ込んで、太ももをまさぐるわ、あまつさえ服の中にさえ手を入れてくるなんて、何を考えているんですか！」

「なんだって、僕はそんな事は……あれ？」

言われて見ると、確かに僕の手は八九寺の言うような状態になっていた。右手は八九寺のスカートのポケットの中に入れられ、左手は彼女の服の中に。

「そんな馬鹿な、僕は手を温めようとしていただけなのに」

「阿良々木さんは無意識に道を歩いていると、道行く小学生に対して性犯罪を働くんですか!？」

心では八九寺を無視しようとしていても、体が勝手に八九寺を求

めていた。もう僕と八九寺の間に、ちゃん言葉など不要なのかもしれない。

「なに良い台詞っぽく言ってるんですか、ただの痴漢ですよ！」

「確かに、無言でというのは紳士的でなかったかもしれない」

僕は八九寺から体を離し、今日という日に因んで、礼儀正しくお願いをすることにする。

「よし八九寺、お菓子をあげるから悪戯させてくれ」

「火葬されてから出直してください」

なんて、結局何時もどおり八九寺に絡んでしまう僕であった。二人並んで、再び歩き始める。

「そういえば、お前名前噛めよな」

「私がどんな反応しても、それを無視し続けていたのは阿良々木さんの方じゃないですか」

うわ、僕はそのレベルで上の空だったのか。

「しかしそこまで上の空になるとは、何かありましたか？ 私自身、結構激しく暴れていたつもりだったんですけど」

「いや、ちよつと戦場ヶ原がな」

「ああ、あのドロドロさんがどうかしましたか」

「今日突然ツンツンに戻っていたんだ」

「はい？」

きよとん、と八九寺。

「いきなり僕の事を忘れてしまったみたい、僕に対して攻撃してきたんだ」

「何か失礼な事をしたんじゃないですか、もしくはそういうイメージプレイとか」

「イメージプレイとか、もうお前がわかんねえよ八九寺。いや、なんかそういうレベルじゃなくてだな、まるで記憶が無くなってしまったような……」

僕は簡単に経緯を八九寺に説明した。

「ははあ、記憶喪失ですか。それはまたなんとというか、お約束です

ね

「お約束とか言うなよ」

「一度攻略が済んでしまったキャラクターの、後日談エピソードなんかで、よくある話ですよ。あの方のようなツンデレなキャラクターにぴったりの展開だと思います。ファンディスクの目玉としても十分いけるんじゃないでしょうか」

「詳しく説明しろっていう意味じゃねえよ！ ていうかホントにお前はこういうキャラになりたいんだ!？」

僕の周りで誰よりも計り知れないのは、コイツなんじゃないだろうか。

「それで阿良々木さんはどうするんですか？ 記憶喪失になってしまった彼女さんの乗換え時ですか？」

「お前実は敵キャラだろ」

下手するとコイツ、貝木の後継みみたいな言動をとるな。

「それじゃアレですか？ 一回デレしまったツンデレキャラを、使いまわす為の演出ですか？ ファンディスクの話に戻りますが、失われた彼女の記憶を取り戻す為に阿良々木さんが努力する過程で、記憶を失った彼女さんが、もう一度阿良々木さんに惹かれ始め、物語終盤にその彼女の記憶が戻って、二人の仲がより深まる。そんなお話を展開するんですよ、大変勉強になります」

「もうお前が記憶喪失になれよ」

戦場ヶ原と反比例するようにして、こいつの性格は悪くなってないか？ というか前のほうが純粹だったような気がする。あの無邪気だった頃の八九寺は何処に行ってしまったのだろうか。

「お前、自分から子供らしいキャラを演じているみたいなのがあったけど、もうそれは止めたのか？」

「何を言ってるんですか阿良々木さん、こんなに可愛らしいではないですか」

「見た目だけじゃねーか」

「それが全てですよ」

「だから、お前のその可愛らしい見た目でそういう事を言うなよな」
「人間見た目じゃあ無くてやっぱり中身ですよ。ただしイケメンの方に限りませんが」

「何言ってるんだお前!? とうかそれ、台詞内に矛盾がないか?」
「いやでも今の最初の一文って、見た目が残念な人が言っても、僻みにしかならないと思いませんか?」

「それはまあ、多少同意するところはあるけれど」
出た大学なんて関係ないと、東大出てから言ってみたい。

「人は見た目が9割とまでは言いませんが、最も大事なフアクターである事は否定できないでしょう? そうでなければ、あんなにキヤラが豹変し、ツンからデレになってしまった戦場ヶ原さんを、どうして阿良々木さんは好きでい続けているんですか?」

「その理論はいささか乱暴すぎやしないか? そういう場合の、性格と中身は完全にイコールじゃあ無いぞ」

「元から今のデレた性格だったら腑に落ちたんですがね、阿良々木さんがあんな性格の女性を好きになった経緯が未だに謎です」

「今更その話か」

「まあ、ああいったSっ気の強い方が好きというニーズもありますしね。阿良々木さん達の業界ではご褒美なんでしょう?」

「僕はそんな特殊な性癖の持ち主の団体に入った覚えはねえよ」

「しかし阿良々木さん達のような、足フェチの方はMの方が多いとお聞きしますが」

「そんな怪しげな雑誌に載ってたような眉唾話を信じるな。というか何時僕が足フェチになった」

「以前阿良々木さんが羽川さんに、お願いだからお前の足の爪にペディキュアを塗らせてくれないかと、頭を深々と下げてくださいている所を目撃したのです」

「それは思春期の男の子が、友達の女の子にお願いする内容としては普通だろ?」

「そんな普通、怪しげな雑誌でも読んだ事ありませんよ。とうか

そういう事こそ、彼女であるあのツンデレさんをお願いすればいいじゃないですか」

「戦場ヶ原にそんな事言っても、嫌がらずにやらせてくれるに決まってるだろう？ それじゃあ面白くないじゃん」

「……戦場ヶ原さんは記憶喪失じゃなくて、ただ愛想が尽きたんじや無いかと思うんですが……。ところでアザラシさん話は変わりますが」

「人を水族館のアイドルみたいに言うな、僕の名前は阿良々木だ」

「失礼、噛みました」

「違う、わざとだ」

「かみまみた」

「わざとじゃない!?!」

「飽きました」

「僕との会話にかつ!?!」

そんな、僕の方は一番人生で幸せを感じる時間だというのに。

「まあそれは冗談として、阿良々木さん。そんな大変な事になってるのに、こんな所で何をしていますか?」

「ああ、いやこれから羽川と図書館でそれらしい怪異について調べて見るつもりなんだ……。と、行ってる間にそろそろ着くな」

「そうでしたか、それではお邪魔をしておいけませんね。無駄話に時間と頭を使わせてしまって申し訳ありませんでした」

そう言っぺこりと頭を下げる八九寺。

「いや、確かに無駄話だったけれども、お前が謝る事じゃないだろ」

「しかし無駄話を馬鹿にしてはいけませんよ。こういう何気ない会話にこそ、何か重要なヒントが隠されているものなのですから」

「お前もそんな事言っただけだよ」

そんなもの、実際言っただけ勝ち。後から無理にこじつけてしまえば、どんな物でも伏線になりうるのだ。

「まあ阿良々木さんなら、きっと何ともなしに解決してしまいますよ。それが、主人公補正というものです」

「ま、そうである事を祈るよ。じゃあ八九寺、またな」

「ええ、無事解決できる事を祈っています」

僕達は手を振り合って、図書館の前で別れた。

僕が図書館に着いた時、既に羽川は図書館に着いていて、何か作業を始めていた。

「お待たせ、羽川」

「あ、おはよう阿良々木君」

しかし、今更ながら平日昼間に高校の制服を着た男女が、図書館とはいえ学校の外で待ち合わせをしているというのは、周りの目にどういふ風に映るんだろうか。羽川の評判が少しだけ心配だ。僕の方は征制服姿で学校をさぼるのは、結構慣れているんだけど。

「何をしてるんだ？」

「取りあえず探す場所の分担をしようと思って」

見ると羽川は、自由配布の図書館の見取り図に何かを書き込んでいた。

「阿良々木君、説明文と物語文なら、物語の方が得意だよな？」

「国語の話か？ 確かに理系なのに何故かそっちの方が得意だな」

でも古文は苦手である。まあ僕の受験に必要な教科では無いけど。

「その場合、あんまり理系文系は関係無いんだけどね」

「それで、どうして今勉強の話なんだ？」

「別に勉強の話じゃないよ。うん、それじゃあ阿良々木君には文学とか、そっちの方を調べてもらう事にするね」

そう言っつて、羽川は僕に見取り図を渡してきた。

「なあ羽川、この丸がついてる所が僕の担当なのは解るんだが、こっちの尋常じゃないスペースをカバーしてる×印はなんだ？ まさかこの全てが、羽川の担当ってわけじゃあないよな？」

僕と羽川の読書スキルの差を考えても、これは分担として成り立っていない。範囲が僕の分の五十倍くらいある。幾ら羽川でもこの範囲を一人で、というのは無理だろう。すると羽川は慌てて訂正し

た。

「そんなわけないじゃない、それは既読分だよ。念のため、新しい本が入ってないかは確認してみるつもりだけど」

「それでも十分驚くべき事だけだな」

殆ど担当しているみたいなものじゃないか。呼び出しておいでなんだけど、図書館において僕に羽川を手伝える事なんてあるのだろうか？ まあとは言っても、やるしかないんだけど。

「というか調べる以前にさ、現時点で羽川は何か思い当たるような節は無いのか？ 人間の記憶を奪ってしまうような怪異とか」

これだけの量の本を読んでいるのだ。そういった話や、伝承みたいな物を結構知っていそうな感じだけど。

「うーん、あんまり人の記憶に対して干渉する、っていう怪異の話はピンと来ないんだよね」

「そうなのか？ 知らない僕が言うのも変だけど、そんなの、結構な数が居るもんだと思ってた」

「かなりマイナーな所までレベルを下げてしまえば、もちろん居ない事は無いんだけど、それこそ数が多いからね。結局そんな情報は役には立たないよ」

成る程。データが無いというのと、データが多すぎるというのは、大して変わらないからな。質の高い情報だけを拾ってこれれば、それに越した事はないのだけど。

「そうは言っても阿良々木君、行き詰ったら本だけじゃなくて、インターネットなんかで調べるのも重要だと思うよ」

「ああいうのって当てになるのか？」

「インターネット上とはいえ、そういう情報があるって事は、少なくともそういう風に言い伝えている人がいるって事でしょう？ それならば、それが一般的に正しいかどうかはさておき、今回の場合、意味はあると思うけれど」

「確かに、そうだな」

「多かれ少なかれ、人々にその存在が伝わってさえいれば、怪異と

して成立するはずだから。でもそういうのも入れると、本当に数が膨大になっちゃうんだけれどね」

「そうだろうな、でもそれじゃあ結局どうすればいいんだ？」

「だからかなりピンポイントに、今の戦場ヶ原さんの状態に近い物を探すべきだと思う。似ている所がある、みたいなレベルだと収集がつかなくなっちゃうだろうから、条件を厳し目にして振るいにかけてね。まあこの辺りのさじ加減が難しいんだけど」

「わかった」

「それと今更聞くけれど、忍ちゃんや神原さんは手伝ってはくれないの？」

「あー、それなんだけどさ。忍の方は僕が戦場ヶ原に攻撃されてた時に、一度起きたみたいだったから、さっき手伝ってくれないかって頼んだんだけど、こんな下らない事、僕は手を貸さんぞ。とか言つて今はもう寝てる」

「そうなんだ、まあ忍ちゃんは完全に私たちの味方って訳じゃあ無いから、そういう事もあるよね」

まあそうだけど、今日はやけに薄情な感じだった。あんまり戦場ヶ原の事は、元から好きじゃないみたいな感じだったから、そのせいかも知れない。

「神原さんは？」

「そもそも電話に出なかった。授業中だったからかも知れないけど、折り返してこないあたり、多分家に携帯を忘れてる」

機械音痴のせいかもしれないが、結構あいつ充電を忘れたりとか多いんだよな。最近は機能自体は使いこなせるようになったんだけど。それに僕が言えたことじゃ無いが、あいつあんまり頭脳労働向きじゃないんだよな。状況によっては、誰よりも頼りになるんだけど。

「それは仕方ないね、じゃあ取りあえずは私たち二人だけで探して見ようか」

「だな。それじゃあ早速始めるか」

「うん。解つてると思うけど、閲覧室の中ではお喋りは駄目だよ。これもあんまり良いことじゃ無いけど、相談とか、何か気がついたことがあつたらメールしてね」

なんて言つて別れたのが三時間くらい前。しかしこと羽川との勉強会以外では、あまり利用した事が無い僕にしてみると、この図書館というのは、本当に使い方が難しい施設であつた。第一あの本達はどのくらい基準で並べられているのだろうか？ 大まかなジャンルで分かれているのは当然としても、それ以上はさっぱり判らない。本の背表紙に「905」とか「シ」なんて書いてあるシールが貼られていて、数字に関しては周りの本も、近い数字が並んでいる所を見ると、きつと並び順的に何らかの意味があるのだろう。そういう物だと誰かに教わつた記憶もあるのだが……。まああんまり無い知恵を絞つてもしょうがないと思い、タイトルからそれっぽい物を選択して読んでいく事にしたのだが、結局それらしい記述を見つけない事は出来ず、こうしてロビーで休憩していた。

「阿良々木君お疲れ、休憩？」

すると丁度羽川もロビーに戻つてきた。

「ああ、……図書館っていうのはどうも疲れる。羽川はよく1日中こんな所に籠つていられるな」

「何言つてるのよ、阿良々木君だつて最近私と一日中ここで勉強してるじゃない。それに今阿良々木君が疲れているのは、図書館のせいじゃなくて、必死に調べ物をしているからだよ」

「まあ、それは」

必死になりもする。もう少し休憩したら、今度はパソコンからも検索をかけてみるか。

「ん？」

そこでふと、カウンターの所に明るいオレンジ色で飾りつけがされているのが目に入った。そういえば今日はハロウィンか。別に日本では学校が休みになったりするわけでも無いので、特に気に留めてはいなかつただけだ。

「あつ……」

「どうしたの？ 阿良々木君」

「妖精、なんじゃないか？ 戦場ヶ原の記憶を奪った怪異は」

「妖精？ 妖精ってフェアリーとかピクシーとか、そういう妖精？」

「ああ、その妖精だ」

「確かに妖精が森なんかで人の記憶を混乱させて、道に迷わせるなんて話は聞いた事があるけど、決め手に欠けるといっつか……」

「普段ならそうだけどさ」

「？ ああ、十月三十一日」

「そう、今日はハロウィンだから」

妖精、精霊や魔女が現れると信じられていた日である。今日という日にその怪異が現れるのは、これ以上無くらしいと言えた。あとは戦場ヶ原が言っていた子供の容姿が、妖精らしさを彷彿させるには十分だったのも大きい。

「そうだね、妖精なんて漠然としすぎて盲点だった。確かに今日にふさわしい怪異と言ったら、それくらいしかないかも。でもよくそんな事思いついたね、阿良々木君」

「いやまあ」

一年くらい前に、妹から無理やり読まされたライトノベルに、妖精が記憶を奪うような描写があったのだ。けれど僕が覚えていないだけかもしれないが、とくに対処法、解決法みたいなものは、載っていないかったと思う。

「うん、かなり良い線行ってるかも。ちよつとそつちの路線で調べてみる。妖精なんて、一冊図鑑が出来ちゃうくらいポピュラーな怪異だから、きつと対処法なんかも探せばあるんじゃないかな」

「だな、僕も引き続き調べて見る」

「ううん、阿良々木君はもう図書館はいいよ、慣れない作業で疲れているでしょう？」

「え、ちよつと待ってよ羽川さん、そんな戦力外通告みたいな」

確かに役に立ってはいなかったけれど！ 見捨てないで、僕だっ

てやれば出来る子なんだから！

「ううん、ここまで解つたら、やっぱり阿良々木君は、戦場ヶ原さんのそばに居てあげた方がいいと思う」

「戦場ヶ原のそばに？」

「うん、今一番大変なのは、阿良々木君じゃ無くて戦場ヶ原さんだと思うから」

確かに、気がついたら記憶が無くなってるとなんて、大変どころじゃない。自分の事ばかりで、戦場ヶ原自身の事を考えてやれていなかった。

「まあ阿良々木君も動揺してるのは判るけど、でも駄目だよ、ちゃんと自分の彼女を支えてあげないと」

そこまで羽川に言われたら首を縦に振らざるを得ない。

「わかったよ羽川、あとは任せた」

「任された。こっちも何か判つたら連絡するから、頑張つて」

そして僕は図書館をあとに、戦場ヶ原の家へ向かう事にした。

「貴方、また電話なんてかけてきて」

戦場ヶ原の家の前に着いた僕は、いきなりチャイムを押す勇気が無かったので、取りあえず電話で機嫌を伺ってみた。もしかしたら無視されたり、着信拒否にされているかも知れないと思ったが、無事戦場ヶ原は電話に出てくれた。

「その、話が見たいんだけど。少しいいか？」

「手短かに用件だけ述べなさい、私は忙しいの」

「いや、そう言わずにちゃんと聞いてくれ。お前にとっても重要な話なんだ」

「重要かどうかは私が決めるわ、十五秒だけ時間をあげる」

「おいちよつと」

なんだそのTVコマーシャルみたいな時間は。

「十四、十三、十二……」

「覚えてないかもしれないけど、お前は数日前に会った妖精に記憶を消されてしまったのかもしれないんだ、だからお前自身の記憶を取り戻す為にも僕に協力してくれっ！」

物凄く早口になってしまったが、聞き取れただろうか。少しの沈黙の後に聞こえた戦場ヶ原の声は、すこし上ずって聞こえた。

「妖精が……なんですって？」

「妖精がお前の記憶を奪ってしまったのかもしれない。つまりお前は、そのせいで今記憶喪失なのかもしれないんだ」

今度はさらに長い、それこそ三十秒くらい沈黙が続いた後。

「ふふっ……あははははははっ、妖精が記憶をね、それで？」

戦場ヶ原さん大爆笑。こんな笑い方をする奴だったっけか。あまにも久しぶりすぎて、この状態の戦場ヶ原に対して違和感がありすぎる。

「いや、笑ってしまうのも判らなくは無いんだけどさ、真面目に聞

いってくれ。今回も前回の蟹同様、怪異の仕業だと思うんだ」

「今回も、蟹？ 何のことかしら？」

あれ、この辺りの記憶も無いのか？ そもそも今の戦場ヶ原の記憶が、どの辺りから途切れているのか、それが時間軸的な物なのか、事象的な物なのかすら判らない。

「その、今家の近く、というか家の前に居るんだけど、詳しい話が見たいから中に入ってもいいか？」

「……ええ、構わないわ」

「ありがとう」

僕はドアノブに手をかけ、少し慎重になりながらドアを開ける。中では戦場ヶ原がテーブルの前に座り、携帯電話を折り畳んだ所だった。特に臨戦態勢というわけでも無さそうだったので、僕も戦場ヶ原の向かいに腰掛ける。一応意識して周りを見渡し、妖精みたいな物が居ないか気配を探したが、それらしいものは感じ取れなかった。

「それで、改めて何の用かしら、阿良々木君？」

「お前が妖精のせいで記憶喪失になってるって話だ」

「ふふふつ、本当に貴方は愉快的脳みそをしているわね」

本当に、容赦の無い暴言を吐くなコイツは。

「ていうか協力しろよな、お前だつてこのままじゃあ困るだろ？」

「別にそんな事は無いわよ？ ああでも今正に不審人物に付きまわられて、少し困っているけどね」

「お願いしますから協力して下さい！」

もうとにかく下手に出るしかない。本当に素朴な疑問なのだが、どうやってこの人と会話してたんだろうな昔の僕。

取りあえず気を取り直して、コミュニケーション再開。

「蟹の事は覚えていないのか？」

「何のこと？」

記憶に無いのだろうか。あの一件が、戦場ヶ原の性格を、ここまですぎ澄ませてしまう原因になったはずなのだけだ。

「お前の母親が、その……怪しい宗教にはまった時の」

「……なんで貴方がそんな事を知っているの？ ああ、そういえば彼氏なんだっけ？」

「先ずそこからかよ」

もしかして今までのとはぼけられていたのだろうか？ だとしたら前途多難過ぎる。妖精よりもこの状態の戦場ヶ原の方が強敵って感じた。

「頼むから少しは僕の事を信用して話してくれ、でないと話が全然進まない」

「嫌よ、何処の誰だか知らない相手に、自分の話なんかしたくないわ」

「そんな」

「だから貴方の方から自分の事を話さない、それで信用に足るか判断するわ」

まあ、それでもいいか。それで戦場ヶ原が何かを思い出せば万々歳だ。むしろ僕の話の話を聞いてくれるというだけで、一歩前進である。

「ええつと、一応僕はお前の彼氏だった訳だけれど」

「そもそも先ずそれが信用できないんだけど、一体どういう経緯で私は貴方とつきあう事になったのかしら？」

「まあ、そうなるよな……」

僕は簡単に、階段で戦場ヶ原を受け止めた辺りから、告白を受けるまでの話をした。途中相槌こそ口々に打たないものの、戦場ヶ原は大人しく、結構真面目に僕の話の話を聞いてくれたように思う。

話しているうちに段々と、戦場ヶ原に対する違和感が消えてきた。ああ、確かに昔僕はこいつと、こんな風に話していたな、そんな懐かしい感じ。

「戦場ヶ原さんは随分と惚れっぽい女なのね」

「うん、お前だけだな」

僕が話し終えた後の彼女の感想は、全くもって見も蓋も無いもの

だった。

「そう、そしてそれ以降、私は貴方に対する態度を軟化させたわけね」

「いや、あんまり変わらなかった」

「はい？」

「何故だか付き合い始めてからも、僕に対するお前の態度は、今みたいな感じだった」

「貴方よくそんな女と付き合っていたわね」

「だから、お前だけだな」

まあそれは、僕自身たまに思ったりしたけれど。

「まあしょうがないわね、自分で言うのもなんだけど、私相当可愛いし、多少性格がアレでも、そんな事気にならないわよね」

「まるで僕が、女を顔だけで選んでる奴みたいない言いは止めてくれないか？」

「そうじゃないなら、貴方随分と特殊な趣味の持ち主なのね、じゃあさつき私が首をボールペンで切りつけた時も、貴方は心の中で喜んでいたの。ああ、だからあんな事をされても、懲りずにこうして再びのこのこ現れる事が出来たのね、少し不思議に思っていたのだけれど、納得したわ」

「納得するな、それは誤った認識だ。僕はあくまで正常な感性を持った、普通の男子高校生だからな」

その後、今度は戦場ヶ原の方から幾つか質問をされた。内容は、高校の中では二人はどんな感じだったのか、とか（高校に入った時の記憶はあるそうだ）僕の家族の事とか、そんな些細な事。そして最後に。

「貴方、羽川翼と、神原駿河という人間を知っているかしら」

確認をするように戦場ヶ原。

「ああもちろん、僕たちのクラスメイトと、後輩だ。お前とは両方とも中学校も同じだったな」

「そう……貴方そこまで、私の中学時代の事まで知っているのね」

「信じてもらえたか」

「ええ、ストーカーにしては優秀すぎるわね。それでもその可能性が0になったわけでは無いけれど、取りあえず今は貴方の言葉を信じる事にするわ」

「そうかい、そりやどうも」

さて、ようやくとスタート地点である。といっても、具体的に何をすればいいのかは分からないわけだが。さっきまでの会話の途中で、記憶が戻ってくれる事を期待していたんだけど、どうやらその様子もない。

ふと、携帯に着信があった。表示を見ると羽川から。

「ごめん、電話だ」

「どうぞ」

僕は一応断りをいれてから羽川の電話に出た。

「もしもし」

「もしもし、阿良々木君」

「どうした羽川？ 何かわかったか？」

「うんまあ、ところで阿良々木君。戦場ヶ原さんは今そこにいるの？」

「ああ」

「ちよつと外してもらえるかな？ あんまり本人の居る前で、積極的にしたい話では無いし」

「まあ、そうだな」

僕は一旦席を立ち、家の外に出た。

「それでどうしたんだ、羽川。何か解決策が見つかったのか？」

「残念ながら、そういうわけじゃないんだ。あれから調べる本を妖精関係に絞って、十五冊くらいざっと目を通したんだけど。それらしい、決め手になるような資料には行き当たらなかったの。でも一応経過報告と、もう少し戦場ヶ原さんの症状を聞きたかったから」

「そうか……」

まあ、そうそう上手くはいかないよな。というか、あれから一時

間ちよつとしか経ってないのに十五冊か。やっぱり羽川さんすげえ。
「あんまり考えたくないけど、そもその前提が間違っているって事も、考えないといけないと思う」

「まあ、もちろんその可能性もあるよな」

寧ろ当然といえよう。もともと僕の浅知恵からひねり出したものだし。

「それ以外にも、少し気になる事もあるから、取りあえず情報交換をしましょうか」

それから、僕は戦場ヶ原の様子等を伝え、羽川はそういう事をする妖精の特徴、後は二、三具体的に確認して欲しい事と、アドバイスを受けた。

「うん、それじゃあこっちももう少し調べてみる。阿良々木君も頼んだ事、よろしくね」

「ああ、わかった」

僕は電話を切って、再び家の中へ。戦場ヶ原は先ほどと変わらず机の前に座ったまま、携帯を弄っていた。

「お友達かしら？」

「ああ、羽川だ」

「彼女も私が今、どういう状況かを知っているのね」

「うん、そして協力もしてもらっている」

「そう」

僕は羽川に言われたアドバイスを、確認しておいて欲しいと言われた事なんかを思い出しながら、会話を続ける事にする。

「本当はもっと、大勢に協力を仰ぎたいんだけどな」

「最近の私、あまり友達がいないみたいね」

「まあ、そうなんだよな」

僕も人の事は言えないんだけど。

「本当は神原にも協力してもらいたいんだけど、あいつも微妙な立場だからな」

「どういう事？」

「ああ、お前は覚えて無いんだな。僕とあいつはお前を巡っての恋敵だったんだ。もうとっくに決着はついたんだけどさ。でも神原からしてみれば結果的に、僕がお前を奪った、みたいな形になってしまったからな。このままお前の記憶が無くなっていた方が、あいつにとっては都合がいいのかもしれない」

「ああ、そういう事。まあそれは確かに、協力を仰ぐのは止めておいた方がいいのかも知れないわね」

「やっぱりそう思うか？」

「ええ、幾らもう決着がついた事とはいえ、そういう話って結構根深いものよ。実際頼めば彼はやってくれるでしょうけど、あまりお互い気分のいいことじゃないでしょう？」

「まあ無理に協力を仰ぐつもりもないさ、解決の糸口らしき物も丁度見えた所だし」

「あら、そうなの？」

まあ殆どが羽川の功績なんだけれどな。というか、マジで羽川凄すぎるだろ。実際に直接見る事も無く、話を聞くだけでその怪異の正体を見破る。忍野が実際に八九寺との一件等で見せた事ではあるが、

彼女は専門家ではないのに、それをやってのけた。

「その解決策っていうのを教えてくれないかしら？」

「もちろん、でもその前にお前に一つ確認したいんだけどさ」

そう言っ僕は改めて彼女に向かい合った。

「お前は戦場ヶ原ひたぎじゃないな？」

時間は少し遡って、羽川との電話の続きである。

「少し気になる事があってね」

「気になる事？」

「さっきも言ったけど、前提の話」

「ああ、今回の怪異が妖精かどうかって話か」

「ううん、もつと前提の話だよ」

「え、まさか戦場ヶ原が記憶喪失なのは、怪異の仕業じゃないって
いうのか？」

「ううん、もつと前」

「これ以上前だって？　なんだそれ、検討もつかないぞ？」

「えっとね、そもそも本当に戦場ヶ原さんは記憶喪失なの？」

「は？」

「いやいや、そうだろ。まさか、戦場ヶ原の悪戯だっていうのか？」

いくらハロウィンだからといって、これはやり過ぎだろう。

「ううん、そうじゃないよ」

「じゃあ、どういう事だよ」

「そもそもその阿良々木君と一緒にいるその人、本当に戦場ヶ原さ
んなの？」

「」

それは。それは本当にいつの間にか僕が勝手に「前提」だと思っ
ていた事だった。思い込んでいた、と言ってもいい。

「そもそも、今阿良々木君が話しているその彼女が、本人じゃ無い
っていう可能性を、考えて無かったんじゃないかな」

「いや、確かに我ながら記憶喪失っていうのは、突拍子も無い話だ
とは思っけれど、でもそれは」

「取替え子」

僕の言葉を遮り、羽川は聞いた事の無い単語を言った。

「取替え子、またはチェンジリングっていつてね、生まれたばかりの赤ん坊を、妖精がさらってしまつて、代わりに自分たちの子供を置いていくつていう伝承は、結構有名な話なんだ。まあ戦場ヶ原さんはもう赤ちゃんではないけれど。妖精は、人に姿を変えられるのよ」

「いや、でもそれこそ記憶の話になるだろ。それともその妖精達は、本人の記憶まで再現する事ができるのか？」

「彼女は、戦場ヶ原さんしか知らないはずの事を知っていた？」

「ああ、お前や神原の事だつて」

「どれくらい知つてた？」

「え、いや……取りあえず名前は知つていたな」

「それは携帯電話があれば知る事が出来るよ。取替え子で人間の子を演じている妖精は、とても頭が良かったみたいだし、それくらいの事は答えてくれると思う」

「話し方とか、物腰も戦場ヶ原のそれだったぞ？」

「本当に？ いつの間にか阿良々木君から情報を聞き出してこなかった？ 戦場ヶ原さんがどういう人間かを、さり気なく探ろうとはしてこなかった？ 戦場ヶ原さん、その怪異に実際会つて声をかけているみたいだから、ある程度の口調なんかは、相手に伝わっているとと思うよ」

「それは……」

確かにそう言われれば、彼女と話しているうちに、最初は大きかった違和感が、段々と薄れていった。最初に僕に対して文房具で攻撃してきたのも。戦場ヶ原だったから、では無く、武器らしいものが他に見当たらなかつたからなのか？

「でも、成りすますならどうして昔の戦場ヶ原なんだ？ 普通そういうのは、今の戦場ヶ原に成りすますものなんじゃないのか？」

「取替え子の妖精は、入れ替わる前の本物より性格が悪い事が多いそうよ」

性格が悪いって……。しかし、言われて見るとそんな気もしてく

る。いつの間にか、勝手に僕は彼女が記憶喪失だと思い込んでいなかったか？　こと怪異に対して、人間と入れ替わるのと、人間の記憶を弄るのでは、どっちが難しいかなんて、その質問自体がナンセンスである。

「まあ、もちろん私の思い違いかもしれないし、一応鎌だけかけてもらってもいいかしら？」

「ああ、解った。試してみる」

なんていうやり取りを、さっき電話でしていたのだ。今思えばハロウィン、妖精とまで思いついて、「仮装」つまり姿を変えるところにまで、どうして頭が回らなかったのだろう。人間が怪異に変装をするなら、その逆だって、あっておかしくない。それこそ、本当にらしいと言えばこれ以上らしい事なんて無いのに。間違った思い込み程、厄介な物はない。ただ見た目や性格がそっくりなだけで、僕はそれが本人であると、疑う事すらせずに、判断してしまった。ああ確かに、こんな下らない事、忍は手を貸してくれないだろう。ただただ、僕が一人で間違っていたただけだ。

まあでも何にせよ。

「お前は戦場ヶ原じゃない」

僕は再び目の前の戦場ヶ原の姿をした何者かに、確信を持って言った。

「何を言っているの」

「お前は、ずっと前からの知り合いのはずの、神原の事すら知らなかった」

「知っているわよ、彼のことについて知らない事は無い、とまでは言わないけれど」

「まあ、そういう勘違いをしてしまうのも無理は無いんだけどさ」

「何が勘違いだって言うのよ」

「神原駿河っていうのは、戦場ヶ原の後輩の女の子だよ」

「だから　え？」

「確かに、名前だけから性別の判断はつき難いよな」

神原に限らず、僕の周囲の人間は名前から性別が解りにくい。僕の周りで、性別が名前から一瞬で解りそうなのは、おそらく千石くらのものだろう。翼、だってこう言ったら羽川には悪いが、あまり女の子らしい名前じゃあないし。でも彼女は自分から戦場ヶ原の携帯に電話をかけてしまったから、声で女子である事がばれていた。「だって、神原は貴方の恋敵なんでしょう?」

「ああ、神原は百合なんだ」

まあ普通男の恋敵といったら男だもんな。間違えてしまうのも無理はない、でもそれは。

「記憶喪失というのは、説明がつかない間違いだ」

神原の事を使って鎌をかけたのには、少しだけ罪悪感が無いでもなかった。さつきはあんな事言っただけど、実際に僕は神原なら、二つの返事で僕達に協力してくれただろうと信じている。彼女も羽川と同様、ツンからドロになって、ある意味面白が無くなってしまった最近の戦場ヶ原が、今までで一番良いと言ってくれていた。信じていいんだよな? たまに、戦場ヶ原が前ほど明確に拒絶の態度を示さないのがいい事に、過激すぎでは無いかと思えるようなスキンシップをとる事があるけれど、あれは只のネタですよ? 神原さん。なんてぞっとしない事を考えていると、おもむろに彼女が立ち上がった。

「流石にバレちゃった、みたいだな、ひひひっ」

そう言っただけで戦場ヶ原と同じ顔をニヤッと歪めて笑うと、デロン、と文字通り化けの皮を剥くように、彼女の体が服ごと変形していった。

「やっぱり、戦場ヶ原が言っていた子供か」

その変形した後の姿、いや変身を解いた姿は、戦場ヶ原の言っていた奇妙な子供の姿かたちと、一致していた。身長がかなり低い上に、帽子を深く被っているせいで、その顔を伺う事は出来ない。そしてソレは戦場ヶ原とは似ても似つかない、少年のような甲高い声で喋りだした。

「うちが実力行使に出るぞ」

「脅したって駄目だぜ本当に知らねえよ俺はやたら慌てた様子で走って行くあの戦場ヶ原とかいう女を見てそんなときこの携帯を、拾っただけだぜ」

「そう言つて、その携帯を見せびらかす妖精。」

「俺が見える奴なんて珍しかったし声をかけられるなんて本当に、久しぶりだったからな」

戦場ヶ原も怪異に関わった経緯があるせいか、いや、現在進行形で僕と関わりがあるせいか、そういう物を引き寄せやすくなってしまっているのかもしれない。

「そしたらちよつとだけ嬉しくなついついらくも無く親切をしように、なつちまった。ひひひひっ」

「そんな話が信用出来るか」

このままこれ以上話をしても無駄だ。僕は何時でも動き出せるように、眼前の妖精に意識を集中させた。

「そんなに凄んでもしらねーって」

一触即発、そんな空気の中唐突に携帯がなった。僕には無い、戦場ヶ原の物だ。そちらに一瞬気をとられた隙に、妖精は僕に向けてその携帯を投げつけてきた。

「じゃーな結構お前も、楽しかったぜ。ひやはははっ」

そう言つと妖精は、なんと開いていた窓から外に飛び出していった。

「待てっ！」

不味い、逃げられた。実質、今戦場ヶ原の行方の手がかりはあいつ以外に無い。後を追わないと、しかしその前に、戦場ヶ原の携帯のディスプレイが目に残った。

「誰からだ……父？」

戦場ヶ原の携帯のディスプレイに、父と表示されているなら、それはもちろん戦場ヶ原の父親だろう。

一応、出ることにする。

「もしもし」

「もしもし……もしかして阿良々木君？」

「……戦場ヶ原か？」

「ええ、阿良々木君が出た、という事はやっぱり携帯は家に忘れて来たのね」

「え、ちよつと待て、お前無事なのか？」

「何のことかしら？ ああ、ごめんなさい連絡をしていなかったものね、

いきなり急用 遠い親戚のお葬式に出る事になってしまって、連絡する暇が無かったのよ。それで向こうに着いてから携帯が無いのに気がついたの。それから何度かお父さんの携帯を借りて、私の携帯にかけてみたのだけれど、誰も出なかったのよね」

なんだそれは、じゃあ本当にあの妖精は、戦場ヶ原に何もしていないというのか？

「心配しても当然よね。でも今日の夕方には家に帰れるから、安心して頂戴」

「……本物？」

「はい？」

「戦場ヶ原、僕との初デートは何時だ？」

「今年の六月十三日火曜日の放課後よ」

「先週の週末、一緒に見に行った映画のタイトルは？」

「何言ってるの、そもそもそんなの行ってないじゃない」

「戦場ヶ原」

「どうしたの？ 阿良々木君ちよつと変よ」

「すっげー心配した」

「それは、本当にごめんなさい」

「うっん、いいんだ。僕が勝手に一人で暴走しただけだから。

それにむしろ謝らないといけないのは、僕のほうだ」

「……、もしかして、また何かあったの？」

「大丈夫、もう解決したから」

「そうなの。何だか解らないけど、連絡しなくてごめんなさい」

「やめてくれ、お前にこれ以上謝られると、立つ瀬が無いよ。本当、情けない。僕は今回、ただただ必死に空回りして、格好が悪いだけだった」

変な言い方をすれば、ある意味まだあの妖精の方が、戦場ヶ原の携帯を拾ってくれた分、役に立っている。

「そう……、でもね、覚えておいて。」

どんなに阿良々木君が情けなくても、私は私の為に、必死に格好悪くしてくれる阿良々木君を、愛しているわ」

ああ、もう本当に。

「お前は僕の理想の人だよ、戦場ヶ原」

超愛してる。

後日談というか、今回のオチ。翌日朝早く、戦場ヶ原に起こされた僕は、もう使い慣れた戦場ヶ原家のシャワーを借りた後、二人で早めの朝食をとった。携帯を見ると、妹達から「お兄ちゃんの不良！ もう知らない！ 受験なんて落ちちゃえばいいんだ！」みたいな内容のメールやら留守電が大量に入っていたので、少しだけ帰るのが憂鬱になる。それでも二日連続で学校を休む訳には行かない。昨日はあれから家に帰っていないので、今日の分の教科書なんかは、家に帰って取ってこないといけないのだ。

また後で学校で、と戦場ヶ原家を後にした僕は、家に帰る途中、僕に会った。

「あ」

「あ」

僕は僕と同じ制服姿で鞆を肩から提げていた。

「またあったな、阿良々木暦。ひやははっ」

「何やってんだお前、気持ち悪いから早く戻れ」

言つと素直に妖精は元の姿に戻った。

「僕の姿で何してんだよお前」

「いやあてめえの家族は凶暴だなあ阿良々木暦あれはてめえの姉か？ もうちよつとでポニーテールの女に殺される所、だったぜ」

「何で僕の家に行つてんだよ！！」

「っーかどうやって突き止めた。」

「昨日のお前の話をちゃんと聞いてれば家の場所くらい簡単に推理出来たぜ阿良々木なんて苗字は珍しい、からな。ひひひっ」

「ひひひじゃねえよ、もつとゆっくり喋れ、聞き取りづらい。ていうか僕に付きまとうな。もう八口ウインも子供の手相手も終わりだ」

「そう邪険にすんなよ俺はお前が気に入ったんだほらちゃんとお前の為に今日必要な分の教科書をとってきて、やったぜ。ひやはっ」

そう言っつて僕に教科書を手渡してくる。確かに、今日必要なライ
ンナップが揃っていた。

……怖っ。何でわかんのこいつ？

「じゃあまた愉快に遊ぼうぜいや違うな俺がお前で遊ぶんだ、阿良
々木曆。ひやははははははっ」

「あ、待てっ」

僕が教科書に気をとられている隙に、妖精は何処かに走り去って
しまう。後には僕が一人ぽつんと取り残された。

こうして今回のくだらない、僕が一人で相撲を取っていただけで
いう一件は、僕が一匹の迷惑な妖精に気に入られるという、本当に
くだらない、自分としては冗談ではないオチがついたようだ。

早速問題解決の為に、イレギュラーに出来てしまったこの時間を
有効に使う。もう日付はとっくに変わっていたし、こんな事で本
当に悪戯を止めてくれるとは思えないが、僕は取りあえず、近くの
コンビニにお菓子を買いに行く事にした。

008 (後書き)

お疲れ様です。

ここまで読んでくださって有難うございました。

普段は横書きの、改行しまくり超絶駄文(R-18含)を書いている者です。

ので、自分なりに割りと一生懸命書いてみましたが、読みにくかったらすみません。

感想とか、誤字脱字があったら教えてもらえると嬉しいです。
では。

しのぶキラー（前書き）

別にひたぎフェアリーの続きという訳ではありません。
とつかむしる時間軸的には前、偽物語と傾物語の間くらいの話で
す。

猫物語（白）まで読了していないと多分意味が分かりません。
キャラクターがかなり崩壊しています。

現在縦書き用の改行を入れたり、誤字脱字を直したりと、絶賛編集
中です。

しのぶキラー

001

忍野忍の起こした今回の騒動についてを、今後誰かに語る機会は二度と訪れないだろう。それは内緒にしておきたい事で、墓場まで持っていくような内容だったという訳ではなく、単純に僕が今回の事件を、明日には綺麗さっぱり忘れてしまうからだ。

忘れる、というニュアンスは正確ではないのかもしれない。

無かった事になる、というのが正しい表現だろう。

忍野忍こと、旧キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレード。彼女は僕の主であり、同時に僕の従者でもあり、そしてどうしようもなく僕自身である。意識や自我は個別の物を勿論持つては居るけれど、同じ血の流れた個体であり、完全に一つの生き物では無いのかもしれないけれど、とても他人と呼べるような相手でも無かった。

しかし僕が彼女について知っている事は、実際の所そんなに多くないのかもしれない。この実は500歳以上の、ミスタードーナツが好きな吸血鬼のロリ少女をどれ程理解しているかと問われれば、首を捻らざるをえないだろう。

だから僕は今回、この吸血鬼の絞りかすである彼女を責める気は無いし、もともとそんな権利も無い。それは同時に僕自身の責任でもあるし、僕自身の意思によって起こされた物と言われても、反論の余地は無いのだ。

まあ何だか言い訳じみた独白をしてしまったが、今回の事で特に誰かに迷惑をかけた訳ではないのかもしれない。もしかしたらそれはやっぱり僕の希望的観測で、誰かに大きな影響を与えてしまったのかもかもしれないけれど。

言うなればこれは、僕が忍と、自分自身と、本気で喧嘩をしただ

けである。

人は時に自分と向き合わなくてはならない。

反省して成長し、省みて前へ進む。

そういった意味で僕は、忍という存在のおかげで、自分を客観的に見る事が出来るのかもしれない。しかしそうであるにもかかわらず、僕は忍のことを解っていないかった。

そしてそれと同時に、僕は僕自身のことを解っていないかった。解ろうとしていなかった。

僕でない部分を、僕であると思いついて、決め付けていた。

僕である部分を、僕でないと思いついて、見ていなかった。

そして多分、それは忍についても同じ事が言えるのだろう。

つまりはそういう事だ。

でもそれは仕方ないことだとも思う。

人は誰しも自分と向き合わなくてはならない、なんて言うておいてなんだけれど、それは言うほど簡単な事では無い。

誰しも人は自分と向き合って生きている、という訳ではないのだ。目を背けずに、自分自身と折り合いをつけて生きていけるほど、人は皆が皆強くはない。戦場ヶ原も神原も、あの羽川でさえ、己を見つめるのには痛みを伴ったり、大きな時間がかかったり、大切な何かを犠牲にしたりしなくてはいけなかった。だから僕も忍と遅かれ早かれ、こうして向き合わなくてはならなかったのだろう。ぶつかり合わなくてはならなかったのだろう。

たとえ誰にも語ることはない、無かったことになってしまふ事だとしても、無駄ではなかったのだと、そう思うのだ。あるいは、僕自身にそう言い聞かせただけなのかもしれないけれど。

ならばこれは、僕が僕自身へ宛てる、僕自身が僕へ宛てる、ただの独り言である。

「私はどうして阿良々木君なんかと付き合っているのかしらね」

8月18日金曜日、僕は父方の田舎から帰ってきたばかりの戦場ヶ原と一緒に、近所のファミレスで昼食をとっていた。夏休みにしても平日の昼間の店内は空いていて、少し静か過ぎるくらいである。

「……突然何を言い出すんだ戦場ヶ原？」

そしてその静かな店内を更に凍らせるような声で、いきなり別れ話を持ちかけられた。そうとしか思えないような台詞に、思わずハンバーグ定食を食べる手が止まりもする。僕が何か粗相をしただろうか。心当たりが無いどころか、脈絡が無さ過ぎて動揺することも出来ない。

「いえ別に、最近の阿良々木君に対して何か不満があるとか、そういう訳ではないのよ？」

戦場ヶ原はそう言うと、クルクルとフォークでタラコスパゲッティを弄びながら、本当に不思議そうに視線を宙に彷徨わせた。

「ただ正直に言って、冷静に考えると阿良々木君、別に私のタイプの男子という訳ではないのよね」

これがつい数時間前、携帯ショップと一緒に恋人割引プランに入した相手に言う言葉なのだろうか。いや、だからこそなのか？機種変までしたんだぜ？僕。まだ前使っていた方の携帯、機種代払い終わってなかったのに。

「さらっと凹む事を言ってくれるよな、お前……」

付き合っている彼女に、貴方って実は私のタイプじゃ無いのよね、って言われるとこんなにこたえるんだ。知らなかったし、知りたくもなかった。これが明らかに冗談を言ってる口ぶりだったり、戯け

た感じで言われたのなら、微笑ましいカップルのじゃれあいなのかもしれないのだけれど、戦場ヶ原のそれは、本当に不思議でならな
いといった様子だった。

「凹む事ないでしょう、それでも私はそんな阿良々木君が好きなの
だから」

「そう言ってくれるのは嬉しいけどさ」

知らなくてよかった事実を知ってしまった。いや僕自身、自分が
戦場ヶ原のストライクゾーンと真ん中だ、なんて都合の良い思いこ
みはしていなかったけれど。だからってボール球だと思っただけ悲観
的でもなかったのに。

「参考までに聞くけれど、お前の理想のタイプってどんな感じなん
だ？」

「天空の城ラピュタに登場するムスカかしらね」

「……そうなんだ」

ムスカなんだ。

確かに僕とは似ても似つかないな。

「ロムスカ・パロ・ウル・ラピュタよ」

「わざわざ本名で言い直さなくても解るし、むしろ言い直した事に
よって余計に解りにくくなったぞ」

「まあでも阿良々木君に彼の様になれとは言わないわ。理想のタイ
プと、実際付き合っとうまくいく異性とは、得てして全然違うもの
と、よく言うしね」

文字通りの雲を掴むような話から、唐突に現実的な話になった。

まあ確かに、よく聞く命題ではある。

「そりゃあそんなに都合良く、誰もが理想のタイプと巡り会える訳
じゃあないしな」

「違うわよ、それは付き合う以前の、相手を選ぶ段階での話じゃな
い。」

私がしているのはそういう話ではいわ。それにそれじゃあまるで、
皆が妥協して付き合う相手を選んでみるみたいじゃない」

「皆が皆とは言わないけれど、そういうことも多いんじゃないの?」

「少なくとも私は違うわよ、妥協して阿良々木君を選んだ訳では無いわ」

「……有り難う」

本当になんでもないこの様に嬉しいことを言ってくれるよな、こいつ。同じかそれ以上の頻度で、凹むような事も言ってくるんだけど。

「お礼を言う所ではないわよ、私自身の問題なのだから。それにここで貴方が言うべき台詞は違うでしょう?」

「ああ、僕も戦場ヶ原だから付き合っているんだ。戦場ヶ原以外なんて考えられない」

そう、と言って微笑む戦場ヶ原。ここで回答を間違えるほど、僕も彼氏力が低い訳ではない。一転して、バカツプルな二人だった。

「でもさっきお前も言っていたし、よく聞く話だけどき、理想のタイプの異性と、いざ実際に付き合ってみたら、案外上手くいかないっていうのはどうしてなんだろうな」

ふと、さっきの戦場ヶ原の口にしたフレーズが気になった。好みどおりだった筈の異性が、実際に付き合ってみると好きでは無くなってしまう。それどころか、好ましいと思っていた筈の所すら嫌いになるほどになってしまうというのは、よく聞く話だった。

「実際に付き合ってみたら隠れていた本性が顔を出すから、というのがしっくり来るかしらね」

まあ確かにしっくり来はする。そういう意味では僕が戦場ヶ原と上手くやっていけているのは、彼女の第一印象が強烈だったからなのかもしれない。

「ただまあ私としては、そういう場合それよりも、本人自身に問題があるのだと思うけれど」

「本人自身っていうと……ああつまり、自分は相手を理想のタイプだと思っていたけれど、

相手にとって自分は理想のタイプでは無かったって事が」

それはまあ片方だけが満足していても関係は長続きしないよな。

「それもあるし、それよりもそうね、何と言ったらいいのかしら」

そこでスパゲティを一口、咀嚼しちゃんと飲み込んだ後、再び戦場ヶ原は口を開いた。

「例えば、女の子は白馬の王子様に憧れると、よく言っじゃない」

「ああ、よく聞く話だな、それも」

「私はこの話を聞くとシンデレラを連想するのだけれど、それで阿良々木君はどう思う？」

物語の最後に結ばれたシンデレラと王子様は、その後うまくやっていけたと思うかしら？」

「そりゃあまあ幸せに暮らしたんじゃないのか？ 話の流れ的に、シンデレラにとって、王子様は理想のタイプだったって事だろ？」

確かに王子様の方は一目惚れとか、それに近い感じだったのかもしれないけど、それだって理想のタイプと似たようなものだろうし」

「どうかしら、私はそうは思わないわ。だって元の身分が違いすぎるもの。片や一国の王子さま、片や灰被りとまで言われた小間使い」

「釣り合わないって事か？ いや、そういう身分とか社会的な問題はこの際関係ないだろ」

「ええ勿論社会的地位とかそういう話ではないのよ。そうではなくて精神的な問題。」

よく考えてごらんなさい。

シンデレラにとって王子様は理想のタイプで、文字通りの白馬の王子様、つまり彼女は王子様に憧れていたとして、果たしてその憧れは、男女のお付き合いをしたいというベクトルのものだったと思うっ？」

男女のお付き合いか。どうだろう、理想のタイプっていうのはそういう事なんじゃないのか？

……ああでも、違う場合もあるのか。何となく戦場ヶ原の言いたいことが解ったような気がする。

「つまりね、阿良々木君。理想のタイプ、といって頭に思い浮かべた異性は。確かに好ましい人なのかもしれないけれど、実際に付き合う事を想定して思い浮かべているとは限らないのよ。シンデレラはきつと実際には、恐れ多いとか、そういうむしる崇拜に近い感情を、王子に対して抱いてしまっていたのではないかと思うわ。現代で言うところの熱狂的なアイドルファンみたいな感じ」

「成る程」

「男子なんてこういう時思い浮かべる相手は、単に性欲のはけ口としての対象なのでしょう？」

「いやいやいや、それは偏見つてもんだぜ？」

多分。

「そう。ところで全然関係無いし、脈絡も無いのだけれど、さっき聞きそびれたから聞いておこうかしら。阿良々木君の理想のタイプの女性ってどんな人なの？」

質問という体をとってはいたが、本質的には言葉による攻撃だった。十分関係もしていたし、脈絡もあった。そしてこの流れであるにも関わらず、僕が真つ先に思い浮かべたのはおっぱいだった。おっぱいおっぱいだった。

「阿良々木君のそういう解かり易いところ、私意外と好きよ」

「いや待ってくれ戦場ヶ原、僕は何も口にしていないのに一体何を解つたっていうんだ。お前は僕というものを誤解していると思うぞ。僕はそんなに分かり易くてつまらない人間じゃあない」

「大丈夫よ、フォローするわけではないけれど、少なくともつまらなくはないと思うわ」

確かになんのフォローにもなつてねえ。

「それで、どうかしらね？ 私はその基準を合格しているのかしら。これでも大きさにも形にも、それなりに自信があるのだけれど」

そして何もかも筒抜けな僕だった。すげえ恥ずかしい。

「……そろそろ話を戻そう、何の話をしていたんだっけ。確か理想のタイプと付き合っても上手くいかないのは何でかって話だったよ

な？」

「ええ、白馬の王子様となんて、リアルに付き合うところを想像できないでしょうって話」

「でもさ、さっきのそのシンデレラの例って、元の身分が大きく違うから成り立つ話じゃないか？ 現代日本においての一般論に当てはめるのはちょっと乱暴だろ」

「そんな事は無いわよ。身分とかそういう話とは関係なしに、実際に付き合うことを全く考ずに、白馬の王子様を待ってる娘って案外多いと思うのよね」

ああそうか、結論はそこに行き着くのか。

「噛み砕いて言つと、おっぱいだけで選んだ女の子と長続きする訳ないでしょうって事よ」

「悔しい程に分かり易いけど、咀嚼し過ぎて原型残ってねえよ」

そんな風に言われたら納得するしかない。いや別に、僕がおっぱいだけで女の子を選ぶような奴の気持ち解るからではない。断じて僕はそんな奴とは違う。

しかしなんというか夢のない話だ。シンデレラにせよ何にせよ、やっぱりハッピーエンドの童話のその後を想像するのは無粋だな。

「それにもし仮に、シンデレラが相当な身の程知らずで、王子様と実際に付き合う事を妄想するような、夢見がちな娘だったとしても」
そこで戦場ヶ原は一度言葉を句切って、ドリンクバーのアイスティーを口に含んだ。何となく思ってたんだけどこいつシンデレラの事嫌いなんだろうか。

嫌いなんだろうなあ。

言葉の端々に悪意っていうか敵意が見え隠れしている。丁度シンデレラの継母みたいな感じ。

「得てして、シンデレラに限らず、その後の未来妄想図には大抵一つ大きな落とし穴があるわ」

「未来妄想図ってすげえ言葉だな、落とし穴？」

「そう落とし穴。その妄想に登場する白馬の王子様、つまり理想の

タイプの異性の隣に居るのは、往々にして理想の自分像なのよ」

「理想の、自分」

「運良く理想のタイプと巡り会えたとして、果たして現代人の何パーセントくらいが、今の自分に対して不満が無いのかしらね、という事よ。相手が理想どおりであればある程、自分自信が如何に理想とかけ離れているかを突きつけられる事になるわ。他人は自分を映す鏡とはよく言ったものね」

ああ、何だか今度はすつと腑に落ちた。

「なんていうか、こうやって考えてみると男女の付き合いって難しいんだな」

「別に男女に関わらず、人付き合いというのは難しいものだと思うのだけれど」

「まあそうか、そうだな」

こんな会話をしている僕たちは自他共に認める、友達いないカッブルだった。多分恋人同士の電話代がタダになる来月からは、携帯通話料は以前の半分以下になるだろう。

「はあ、友達できねえかなあ」

「……ちよつと、止めてくれないかしら。あまりにも眩きが切なすぎて、私ともあるう者が同情してしまいそうじゃない」

「ていうかお前も僕と同じようなもんだろ？ さつきショップで、携帯の連絡先を転送するアプリについて説明してもらいそうになった時、大丈夫です、手作業でやった方が早いですからって言って、一緒に店員さんをドン引きさせた仲間じゃないか」

「変な仲間意識を持たないで頂戴、確かに私たちは恋人同士だけけれども、そんな変な仲間になった覚えはないわ」

え、そんな。

戦場ヶ原のその台詞に、もしかしたらさつきより深く傷ついたかもしれない。店員さんのあの視線を浴びた時、僕は一人じゃないって思えたからこそ、なんとか自我を保っていられたというのに。

「それに私は今更友達が欲しいなんて思っていないわ。第一もう半

年ちよつとで高校を卒業するのよ、私たち。それで殆ど全て、同世代の人間との関係は切り捨てる事になるじゃない」

「いや、別に切り捨てる必要はないんじゃないか？」

「立つ鳥跡を濁さずというでしょう。腐らせるくらいなら、ばっさり切ってしまった方が良いと思わない？ 実際、高校に入る以前から続く人との関わりなんて、お父さんと神原くらいのものよ、私。友好数値2桁以下は切り捨てたわ」

友好数値ってなんだろう、なんだか人間強度と同じくらい、イタい概念な気がする。しかしまあ、お父さんと神原だけというのは、随分と極端な話だな。戦場ヶ原の場合、それもしょうがないと言えば、しょうがないのかもしれない。

でもそうか、受験勉強漬けで大学のことばかり考えていたけれど、もう後半年で僕は高校を卒業する事になるんだな。

「まあこんな受験シーズンに、そんな悠長な事を考えている場合でもないか」

「そうよ阿良々木君。もし貴方が今年大学を落ちても、関係を切るつもりは全く無いけれど。それでも私は、出来る事なら4年間一緒に大学に通いたいわ」

嬉しい事を言ってくれる。

ただ、と戦場ヶ原は笑みを顔に貼り付けたまま続けた。

「それで、当然だと思ってる、質問と言うよりは確認なのだけれど、貴方夏休みの宿題は、もちろんとつくに終わらせているのよね？」

散々無駄話をしていたのに、唐突に章が切り替わってしまって申し訳ない。

だがしかし、もしあれから先の部分を描写して、それを讀んだ誰かが真似をするといけないので、あの後ファミレスで何が行われたかは、読者の皆様の想像にお任せする事にする。ただ、まだ小さいお子様が居る人や、怒りっぽい彼女が居る人は、彼等彼女等の手の届く範囲に、タバスコを置かない方がいいと、それだけは忠告させてもらいたいと思う。

そんな訳で怒りっぽい彼女を家まで送り届け、まだ違和感があったので洗面所で顔をもう一度洗わせてもらった後、僕は切れてしまっていた文房具を買い足す為に、本屋に寄る事にした。この辺りで文房具を手に入れようと思ったら、我が田舎町では自然と、このちよつと場違いな大きい書店で買うことになるのだ。

コンビ二で文房具を買うのは割高だしな。

手早く必要な物を見繕って、レジに向かう。

「あれ、阿良々木、君？」

とそこで、急に後ろから声をかけられて、僕は咄嗟に振り返った。振り返ってしまった。

……いや、別にそこまで意味深に繰り返して強調する程の出来事が待っていた訳ではないのだけれど。そこには、クラスメイトの女子（少し髪が長くて、結構可愛い）がいた。制服姿しか見たことがなかったから、肩を出したワンピースがお洒落で新鮮である。

だが、そんな事を考えている場合ではない。

向こうが阿良々木君、と呼んでくれたのだから、こっちも名字を

呼んで気さくに応答したいのだが、相手の名前が解らないのだ。

いやマジで、夏休みも終盤、久しく顔を合わせていない、ろくに話したこともないクラスメイトの名前なんて、記憶力のよくない僕が覚えていく訳がない。

僕に友達が少ないのは、こういう所が原因なんだろうか。

あれ、待つてくれ、ちょっと待つてくれ。この娘すげえ胸大きくな？

え、どうして名前覚えてねえんだ、おかしいだろ阿良々木暦。友達が少ないとかそんなどうでもいい思考はこの際置いておいて、目の前の物体を注視する。

ワンピースの襟口の部分がだぼついているせいで、必要以上に谷間が出ているから大きく見えているのか？ うわすげえ、服の力つてすげえ。

左側の肩はほぼ完全に露出しているし、前の方は胸の上に服が乗ってるって感じ。下着という訳でもなく、ちゃんと服を着ているというのに、膨らみの上の部分のラインが解る。

うわあ、うわあ。

「……どしたの？ そんなじろじろ見て」

気がつけば僕の方も彼女から不審そうな目で見られていた。そりゃあ無理も無いが、これだけ胸元を凝視し続けていれば。

「いや……なんか学校に居る時と随分印象が違うから」

「ん、そうだね。普段からこんな格好してると、先生や親とかうっさいしさ」

夏休みだからこそ、か。そういえば長期休みの間だけ髪の毛を染める高校生というのが、全国的に結構な数が居るらしい。だから休みの終わり際に、黒のヘアカラーやヘアマニキュアがよく売れるのだとか。この目の前の彼女も同じように、夏休みに少し冒険してみた感じなのだろう。結構な田舎であるこの町で、彼女は良く言えば垢抜けていて、悪く言えば少し浮いているかもしれない。

「あ、阿良々木君さては今から宿題まとめてやんでしょ？」

「えっ、なんでわかった？」

「だってそういう買い物してるじゃん」

まあ確かにリサイクル紙のノートをまとめ買いとかしてたら解るか。そして何だか今日の僕は、誰かに見透かされてばかりだな。

「大丈夫なの？ 阿良々木君、ちゃんとしたところに進学する事にしたんでしょ。」

「たしか戦場ヶ原さんと同じ大学行くんだっけ？」

「行けたら、だけどな」

「行けるでしょ、7月ぐらいからだけど、結構頑張ってたし」

僕の事をよく知ってるな。いや、もしかしてクラスメイトのこれくらいの情報は、普通持つているものなんだろうか。

「彼女と同じ大学に行くために勉強頑張ってたんでしょ？ すごいよね、このご時世にそんな純な人ホントに居るんだ」

「ちよつと待ってくれ、誰が何時そんな事言ってたんだ」

秘密としてひた隠していたわけではないが、改めてそう言われると恥ずかしい。というか別に、戦場ヶ原と一緒にいたい為だけに、進路を国立大学へ変更した訳では無いんだけれど。

「他ならぬ戦場ヶ原さん自身が、結構普通に言いふらしてたけど」

「マジかよ、何してんのあいつ……」

友達なんて全然居ないのかと思っていたけど、こんなことを話せるようなレベルの人付き合いはしていたのか。しかも言いふらすっていう言葉のニュアンスから察するに、複数の相手がいるんだろうし。

「それまでろくに話したこともなかったのに、いきなり話しかけられてビックリしたよ。別に聞いてもないのに、一方的に彼氏自慢されっぱなしだった。ウザいって思うより、ぽかんとしちゃったもん」

「ホント何やってんだあいつは！？」

意味不明にも程がある。知らない相手にいきなり彼氏自慢なんて。友好数値2桁以下切り捨てはどうした。

「阿良々木君がそう言ってやるもんじゃないんじゃない？ きつと

戦場ヶ原さんよっぽど嬉しかったんじゃないの、知らないけど」

「いやまあそれは、そう言われれば彼氏冥利につきるけどさ」

なんかおかしいだろ、どう考えても。

「でもそれで真面目に勉強するようになったら、阿良々木君も偉いよね、宿題はサボってたみたいだけど」

「サボっていたっていうより、普通に忘れてた。生徒が先生によく言う、宿題忘れました、的な意味合いのものじゃなくて、本当に普通に頭から消えてたって言うか」

先生ごめんなさい、宿題忘れました。このフレーズを吐いた生徒が、本当にうつかり忘れていたケースなんて、実際には1割にもみたないんじゃないかと思う。

大抵は面倒くさくてやってきませんでした。

昔の僕だけだろうか、こんな風に不真面目だったのは。

「あはは、まあ私はそういう意味で、夏休みの宿題を忘れてるけどね」

「え、じゃあ……今からやるのか？」

……の所で彼女を指さして、名前を覚えていないのをごまかす。我ながらせこい。

「んーん、忘れたまま学校行くよ。」

私は阿良々木君と違って大学に進学するつもりはないしね。別に通知表をそんな気にしなければ、宿題なんて出さなくても1つかないしな」

うちの学校は各科目毎、各学期に1〜5までの評価がつけられ、年間で1、まあつまり赤点が3つ以上ついてしまうと、進級だったり卒業だったりが出来ないのだ。しかし逆に言うと、赤点を二つまでに押さえてしまえば、卒業する事は出来るのである。

「夏休みなんて勉強でもしてなきゃ暇だろうに、何してたんだ？」

いや、全然責めるつもりなんてないんだけどさ。これが夏休み最終日、とかなら僕も諦めるけど、今からでもやっちゃえば？」

「嫌よ、面倒くさいもん」

不真面目ちゃんだった。

まあ大半の奴はそう思ってるよな。僕だって面倒くさい。

「というか夏休みが暇なんて、今まで18年間生きてきて思ったこと無いけど……」

「え、皆夏休みなんて暇なもんなんじゃないのか？ 例えば何してるの？」

今年でこそ僕は勉強を真面目にやっていたから、暇だなんて思いはしなかったが、去年までの長期休み、特に夏休みはとにかく暇で暇でしょうがなかった。妹も殆どどっか友達と遊びに行っちゃったし。

「例えばって……友達とカラオケ行ったり？」

「他には？」

「他に……友達と服買いに行ったり」

「他に、その……一人の時とかは？」

「友達と都合が合わなかった時って事？ うーん、確かに暇だったかも。」

でもそんなの1日2日だし、夏休みが暇っていうのはちょっと違うかな」

「そうだよな。」

解っていたさ、友達さえ居れば暇だなんて思わなかったんだろうことくらい。この女子との会話が嫌に楽しくて、ついつっかり自分から地雷原に突っ込んでしまった。

「それに遊び以外にもー、やりたいこと他にもあるしー」

そう言う彼女は、それまでの碎けた感じの口調を、さらにふざけたものにしていけど、その目はさっきまでの数倍、真剣味を帯びていた。

「夢、とかそういうのか？」

「そんな大それた物じゃないけどさ、私の将来やりたいことに、学校の勉強って合ってないんだよね」

まあ勉強したくない言い訳なのかもしれないけどー。なんて茶化

しながら、彼女は続けた。

「最近学校で行われてる教育がどうのこうのとか、そんな事を言うつもりはないんだけど。高校なんて義務教育の延長でしょ？ やりたい事が見つからないうちは、取りあえず学校に行っておいて、一般教養っていうか常識みたいのを習う。その途中でも、これだつていう物を見つけたら、後はもう好きな事を、とことんやっていいと思うんだよね、私は。折角それなりに頑張つて入った高校だから、取りあえず卒業はしようと思っけどさ。ま、私阿良々木君と違つて不真面目だから」

「それは、不真面目とは違つだろ」

僕なんて将来の事とか、やりたい事なんて、ちゃんと考えた事もないかもしれない。宿題やつたら？ なんて考えなしに言つた自分が本当に面目無かつた。目の前の彼女が不真面目なら、僕なんて無面目である。

「ま、こんな事言つても宿題やらなくていい理由にはなつてないんだろーけど。少なくとも、真面目に勉強してる阿良々木君にする話じゃなかつたね、ごめん」

「いや、全然気にしてない。それに僕も前、それこそ進学なんて考えもしなかつた頃は、宿題こそ出してはいたけれど、授業はギリギリまでサボつてたしさ」

まあそのしつぺ返して、今はそのギリギリの出席日数とも戦わなくてはならないのだけだ。

「あー……なんかそう言えば聞いたことあるかも。阿良々木君つて前はワルだつたつて噂だもんね」

「別に悪さをしてた訳じゃないんだけどな」

すると彼女は、僕の台詞に避難めいたものを感じとつたのか、少し慌てたようだった。

「あ、ごめんね。よく事情を知りもしないでワルだつたなんて言うて」

「いや全然、周りから見ればそう見えて当然つていうか。僕自身と

しては、ただ落ちこぼれてただけなんだけど」

事情をよく知らないのはお互い様。

というかこの女子、さつきから凄く仲良さげに喋ってくれてるよな。何だか以前から、こんな風に楽しくおしゃべりをしていた錯覚すら覚える。あまりにもそれが自然すぎて、逆に不自然だった。

「じゃあそろそろ私も帰るね、長い間引き留めちゃってごめん。宿題頑張ってるね」

「おう。お前も、何だか知らないけど頑張れよ」

「あ、ところで最後に阿良々木君」

一度背を向けた彼女はくると振り返り、意地悪そうに笑った。

「途中から何となく思ってたんだけど、私の名前覚えてないでしょ？」

「???!」

ばれてる！

焦った。本当に焦った。申し訳なさとか、ああ、これでまた友達になれそうな機会を失ってしまったとか、そんな事が頭の中を渦巻く。

「あはは、いいよいよ、今までこんな風に話したこと無かったもんね」

「……悪い」

「でも悔しいから名前は教えてあげない、また明明後日学校でね」
そう言うと、ひらひらと手を振って、今度こそ彼女は書店を出ていった。こんなに仲良くなれるなら、もっと前から喋っておけばよかったなんて、名前すら覚えていない僕には、思う資格すら無いんだろうけど。そんな風に楽しいおしゃべりを終えてから、やっと僕はレジへと向かった。

僕が家に帰った時には、あの女子と話し込んでしまった事もあり、もう結構な時間になっていた。もうそろそろ日が沈みそうである。それから夕食までの短い時間で、少しでも夏休みの宿題をやっておこうと思っただのだが、その計画も、部屋にいきなり何の前触れもなく侵入してきた我が妹によって、一瞬でご破算になった。

「よう兄ちゃん。帰ってきたならちゃんとただいまって言えよな。何時挨拶に来るのか待ちくたびれたぜ」

何で何百回言っても人の部屋に入る前にノックもしないような奴から、そんな事を説教されなきゃならないんだ。

「ああもう、うっせえなあ火憐ちゃん。何だよ一体何の用なんだよ」「何だよ兄ちゃん、そんなに怒らなくてもいいじゃん。まさか高校生にもなつて、夏休みの宿題をやるのをすっかり忘れていて、今になつて慌てて始めてる訳でもあるまいし」

無駄に鋭い妹だった。

野生の勘とかそういう類の物だろうか。

「まあいいや。新しい携帯見せてよ、買ったんだろ？」

それが目当てか。火憐ちゃんには家を出る前に、携帯機種変の為の書類を親に用意してもらっているのを目撃されてたからな。けれどもどうしてこの世代の女子は、執拗に他人の携帯を見たがるんだろう。

「解ったよ、ほら、壊すんじゃないぞ。買ったばかりなんだからな」本来なら見せてやる義理なんてないんだけど、その勘の良さに免じて素直に渡してやる。

断じて実は本当に、夏休みの宿題をつい先ほどまで忘れていた、

という事がバレるのが嫌だからではない。

「あれ？ 今流行のスマートフォンとかいうのが欲しかったんじゃない？
なかったのかよ兄ちゃん」

「そうだったんだけどな。恋人割プランに対応してないとか言われて諦めたんだよ。だから、戦場ヶ原と一緒にこの機種を買った」

「戦場ヶ原さんとお揃いの携帯なのか、バカツプルじゃん」
「うるさい」

どんな文脈だろうと、コイツに馬鹿とは言われたくない。

「なんだよ、折角スマートフォンが手に入るかと思っただのに」

「何でだよ、手に入るっておかしいだろ。お前の物は私の物ってか？
前から思考がジャイアンじみてると思ったけど。てか火憐ちゃんも機種変すれば良いじゃないか、もう機種代払い終わってるだろ？」

「でもさあ、あたしが買ってもなんか直ぐぶっ壊しちゃいそうじゃない？
でも兄ちゃんのなら、もし壊しちゃってもプライマイゼロだし」
「お前実は数年前から頭の回転止まってるだろ」

「それにあたしはスマートってがらじゃねーからな。あたしみたいなのは、どっちかっていうとスレンダーって言うらしいし」

「いや、フルって言うんだけど。仮にわざとボケていたんだとしても全然面白くねえから、突っ込む気も起きねえ。どう転んでも頭の悪い妹だ。」

「ま、いいや返すぜ兄ちゃん」

「人の携帯を投げるな。全く、お前相手が僕だから許されてるけど、いや僕も許してなんかないけど、外で他の人にもそんなとんでもない人間性を露呈してんじゃねえだろうな」

「こいつがいつ何時、無自覚に犯罪に手を染めないかとビクビクしてるんだぜ、こっちは。」

それこそ僕の携帯を壊すなんて事とは、比べものにならないような大事件を、簡単に起こしかねないような奴なのだ。以前火憐ちゃんは、歩道を歩いていた子供が、脇見運転をしていた車に突っ込ま

れそうになっていた所を救ったことがある。これだけ聞くと、凄く立派な事をした自慢の妹、それこそ正義のヒロインなのだが、当事者だけが知る裏話があるのだ。

当事者っていうか、あの現場を唯一第三者の視点から見ているのは、僕しか居なかったのだけけど。

そう、実は僕もその場に居合わせていた。

30メートルくらい先の車が、不振な動きを見せたのを確認するや否や、火憐ちゃんは止める間もなく獣のような速度で猛突進。そして勢いそのままに間一髪の所で飛び込んだのだ、車に。乗用車の進行方向に対して左斜め45度に、すごい勢いでぶつかった筈の火憐ちゃんは、そのままボールのように飛ばされると、クルクルと空中で回転して塀の上に着地。片や車の方はというと、進行方向を右に90度変えて、反対側の塀に突っ込んで大破していた。

その事故っていうか事件の後、現場検証をしていた刑事さんもさぞかし不思議だっただろう。塀に突っ込んだ筈のボンネットの右側よりはるかに、左側の損傷の方が大きかったのだから。なのに同じ衝撃を受けたはずの火憐ちゃんは、怪我一つせずピンピンしていた。

そしてその後、ドラマみたいにダイビングして子供を助けようとしたら、ついうっかり車の方に突っ込んだじゃったぜ。と証言していた。

この話の真に恐ろしい所は我が妹が化物じみている所では無い。もし火憐ちゃんが、ついうっかりせずに、子供の方に突っ込んでいたら。証言は供述に、正義のヒロインはただの獵期殺人犯になっていただろう。

「そんな訳ねーだろ、あたしがこんな雑に扱うのは兄ちゃんだけだつて。兄ちゃんは心配性だなあ、そんなだから神原さんから、兄妹仲が良すぎるとか、過保護過ぎるって言われちゃうんだぜ」

「雑に扱うんじゃないよ、兄ちゃんは消耗品じゃねえんだぞ。」

しかし過保護ねえ、お前に対しては、用心してもし過ぎることは

無いと思うんだけどな」

それに神原も結構めちゃうかな所があるしな。あいつの常識尺度も、そういう所では当てにならない。こいつよりはマシだと思うけれど。

「て言うか、お前が神原の前では猫かぶってるだけなんじゃないのか？」

「そんな事無いぜ、最初に会った時こそ、あたし緊張しちゃって巢になれなかったんだけど、人間は誰しもあるの姿が一番素敵で輝いているのだ、って他ならぬ神原先生自身が言ってくれたからな、そんなことはしてないぜ」

「確かにそれは神原先生のすばらしい教えだとは思うけどさ、あんまり影響されすぎないでくれよ……」

前後の文脈が解らないから、そのありのままの姿という言葉が、果たしてそういう精神的な意味合いで使われていたか、かなり怪しい所である。

いやだぜ火憐ちゃん、お前が馬鹿属性に加えて変態属性を付加されたらもう救いようがないもん。

「いやされるね、影響されまくるね。むしろあたしが神原さんになる。見てる兄ちゃん、2、3年後には、あたしは第二の神原駿河となってるからな！」

「頼むから止めてくれ火憐ちゃん。神原先生だって、お前はお前のありのままがいいと言ってくれたんだろ？」

神原だって凄く良い奴で、それには全く疑問を挟む余地はないのだけれど、第二の神原というフレーズからは、ロクな人物像が想像出来ない。

いやホント、僕神原のこと大好きなんだぜ、でもさあ……。

「うーん、そうなんだろうけど、やっぱり好きなものになりたいって言うか、近づきたいって思うじゃん？ てか、人間ってそういう風に成長するもんだろ兄ちゃん。」

みんな違ってみんな良い、なんて小学生でも知ってるけどさ。地

べたを速く走れても、沢山の歌を知っていても、それでもどうしても、私は小鳥や鈴になりたいものなんだよ、って誰かが言ってた」
一瞬火憐ちゃんにしては聡い事を言うなと思ったけれど、他人の台詞か。誰かって誰だよ。

「ま、そうだけどさ。でもだからといって第二の神原はやり過ぎだぜ。愛弟子とか、その辺りで妥協しておけよ」

「兄ちゃんがそういうならしょうがないか。うーん、そんじゃあせめて神原さんみたいな姉ちゃんが欲しかったなあ」

……何とか、多分こいつは考え無しに言ったんだろうけど、僕の立場からすると結構微妙な台詞だった。僕がおかしな表情をしていたのを察したのか、慌てて火憐ちゃんがフォローを入れてくる。「あ、ごめん兄ちゃん、別に戦場ヶ原さんが嫌って訳じゃ無いんだぜ」

「解ってるって」

「戦場ヶ原さんもすげえ優しいし、格好いい人なんだけどさ、でもなんでか知らないけど、ちょっと怖いんだよなあ、クールだからかな」

こいつホント鋭いな。野生の勘がバリバリ働いてやがる。

「……まあそのうち、仲良くなるだろ。戦場ヶ原だってお前じゃないけど、まだ緊張してるんだよ。あいつ、年下の人間が苦手らしいし」

「うーん」

まだ何かを思案している様子の火憐ちゃん。

「そうだ、兄ちゃんと神原さんが愛人関係になればいいんだよ」

「よくねえよ！ さらっと何言ってるやがんだ！」

「ああ、じゃあもういつそ、あたしが神原さんと結婚すればいいんだな！」

「だから！ どうしてお前はそう冗談にならないような、際どい発想ばかりするんだよ」

この妹は着実に神原の悪影響を受けている。しかも割と深刻なレ

ベルで。

「つつかお前彼氏いんじゃない、瑞鳥くんだけ。会ったこと無いけど」

「まーなー、私も紹介したいんだけどさあ。何か兄ちゃん、あいつ怖がらせるような事しなかったか？」

「何だよ、僕にビビって会いに来ないのか？ ちっちゃい奴だな」

「ちっちゃい言うな、ちっちゃいのは兄ちゃんだろ」

「うるせえでつかいの……？」

馬鹿みたいな言い争いをしていたのに、突然酷い違和感に襲われた。一瞬遅れて、背筋を言いようもない冷たくて恐ろしい感覚がはい上がってくる。

「ん、どうしたんだ兄ちゃん？」

「今僕は、お前のことをでつかいのって呼んだよな？」

「ああ呼んだぜ、最近そうでもないけど、前は結構そう呼んでなかった……っけ？」

あれ何かおかしいな、と火憐ちゃんも首をかしげはじめ。そう、確かに僕は火憐ちゃんの事をでつかいのと、呼んでいた。

しかしこのでつかいのという呼称は、
一体、誰と比べて大きいと言っているのか。自分自身と比べてなんて自虐的なものでは無いはずだ。

それなのに、でつかいの、だなんて。

まさか、

？？火憐ちゃんの他に妹が居る訳でもあるまいに。

「うおえええええっ！」

「うわあああああっ!？」

唐突に吐き気に襲われ、口に手をやる間もなく胃の中の物を吐き出した。

気持ち悪い。

気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い。

ふと鏡に映った自分の姿が、内蔵むき出しの人体模型だったかの

ような。

それでも何の違和感も無く呼吸をしていた自分に気がついたかのような。

途方もない濃度の不快感に襲われていた。

「ただただ大丈夫か兄ちゃん！ 何処から攻撃された？ それとも妊娠したか！？」

「うえっ……大丈夫、じゃ、ないかも、げほっ」

流石に突っ込む余裕も無い。動揺する火憐ちゃんに介抱されながら、唐突に全く関係ない事を思い出し出していた。

あの昼間本屋で出会ったクラスメイト。昼間は結局最後まで思い出すことが出来なかったが、彼女はそう、確か。

羽川翼という名前だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8882i/>

代物語

2011年3月22日22時25分発行